



『都志見往来日記』異聞

Yamanaka  
Tomotaka

山中與隆

Duo-Yamanka

『都志見往來日記』  
異聞

---

山中與隆



舞台となる地域の略図



陀峰(あみだみね)から遙かな大峯(おおみね)まで稜線が重なり合って続いている。

## 目次

『都志見（つしみ）往来日記』異聞

1

告白 1

巖島（いつくしま） 5

弟子入り 51

探勝旅行 103

上伏谷村 124

家出 183

別れ 199

岷山と出会うまでのユキ

211

湯ノ山の別れから 238

再会、ユキの死 248

編者あとがき 283

『都志見（つしみ）往来日記』異聞

山中與隆

告白

岡岷山（おかみんざん）。広島藩主浅野重晟（しげあきら）の代に広島藩の絵師として重きをなし、重

晟の引退後は自らも奥詰の役を退いて、重晟の近習として仕事を続けた。その岷山が藩の同僚で親友の春水に絵を志す女性ユキに関わる出来事を告白したとき彼はもう七十を越していた。必ずしも先が長いとも思えなくなつて、このような身の上話をしたのかも知れない。それは岷山が『都志見（つしみ）往来日記・同諸勝図』を著すために広島藩西部を旅行したときの出来事であつた。



「実は、もう十年以上前のことなんじゃが、わしの心の中にだけしまっておくのが辛くなつてのう……。この年になつてこのようなことを人に話すのはまことに気恥ずかしいのじゃが……。それにこれは、自分の恥を晒すことだし、家のものが聞けば憤りの種となるかも知れんのじゃが、春水殿ならわかつてもらえると思つて……。」

こういつて岷山は話し始めたのだった。

岷山はときどき春水のところに来ては話の続きをした。話しの途中で、思い出の中を彷徨っているように長い時間庭を眺めることもあった。またあるときは話しながら涙ぐむことさえあったのだった。

それから一年少々、秋の冷たい雨の日の夜おそく、岷山は眠るように息を引き取った。文化三年十一月三日、享年七十二才であつた。岷山のなきがらは城

から程近い心行寺に葬られ、墓碑銘は春水が書いた。

5 巖島（いつくしま）

話は、岷山五十九才の秋のある出来事から始まる。

岷山が、藩命を受けて島の絵図を作製するために巖島に逗留していたことである。岷山はその十年ほど前に巖島の浦々を回つて図取りを行い『巖島南北両面図』を完成させている。今回は主要な風景や建物の絵図集を作るのが目的であつた。絵図の作製には何日もかけて、島内のあちこちを歩きまわり、島の最高峰である弥山（みせん）にも登るといふ、六十近い岷山には労力のいる仕事であつた。し

かしそのとき岷山が経験した出来事は、そんな疲れを吹き飛ばすに十分のものであつた。

巖島はもみじの美しい季節を迎えており、たくさんの参拝客や見物客で賑わっていた。岷山が巖島で最も人の往来の多い、大鳥居が間近に見えるあたりで写生をしていると、三人連れの婦人が足を止めたのだった。写生しているときに通りがかりの者が立ち止まって見ていくのには慣れていたので、岷山は

まったく気にかげずに描き続けた。しかし、そのときの三人の婦人は熱心で、飽きることなくいつまでも見続けている。それもただ見ているだけでなく、彼の絵について何か囁きあっている。中の一人が絵を学ぶ者でないと知らないような言葉をとときどき使っていることに岷山は気付いた。

とうとう三人の婦人は、彼が写生を終えるまでそこにいた。岷山も、これほど飽かずに見ている人と

いうのは初めてであつた。道具を片付けた岷山は、婦人たちがまだそこにいたので、軽く会釈して立ち去ろうとすると、婦人の一人がいきなり、明日も写生をされるのですかと岷山に尋ねた。彼はまだ数日島内の所々で写生する予定だつたので、そういうと、明日はどのあたりで描くのかを重ねて尋ねる。そのように熱心に尋ねるのは、三人の中ではいちばん小柄で、聡明そうな落ちついた声で話す婦人だつた。

婦人たちと別れた岷山は、明日行くつもりの千畳閣や五重の塔を見上げたりしながらぶらぶらと宿に帰った。

その夜、岷山が昼間描いた絵に手を入れてみると、宿の主人が部屋にやって来て、三日前から巖島見物をしている三人のご婦人たちが、先生に絵のことを聞きたいといっているが、部屋に来てもらってもい



いかというのだ。岷山は、昼間の三人に違いないと思ひ、彼女たちも同じ宿に逗留している偶然を幸運だと思つた。この日はあの婦人たちと相前後して宿に帰つてきたはずだが、客の出入りの多い大きな宿なので、岷山は気付かなかつた。しかし婦人たちは、岷山が同じ宿であることを知つていたので。絵の道具を持って出入りする岷山は、他の客よりも目立っていたのだらう。

知らない人が話を聞きたいといつてきたり、逗留先の主人が所蔵している絵の鑑定をしてくれといつてきたりすることを、岷山は方々で経験していた。そういうとき彼は、もつたいぶらずに気軽に、しかも鑑定料など一切取らずに応じてきた。そのときも軽い気持ちで承諾したのだった。相手が女性であることを少しは気にしたが、三人連れだし自分は六十の老人、それにご婦人たちも見たところ四十前後と

いった感じだったので特に気にすることもないと思つた。だから宿の主人も、この申し出を岷山に取り次いだのだらう。

岷山は、いつ来てもらつてもかまわないと主人にいつて、作業を続けた。遠くの部屋の酒盛りや、歓談の聲がときどき聞こえてくる。岷山は、巖島に来たときはいつもこの宿を利用しており、比較的静かないちばん奥まった部屋をとることにしていた。

まもなく主人の重そうな足音に混じって、いかにも女性らしいそそとした衣擦れの音が廊下を近づいてきた。主人が障子の外から声をかける。岷山が返事をすると、主人に案内されて三人の婦人が、かまこまった表情で入って来た。昼間の三人だ。三人は広い部屋の端に窮屈そうに並んで座ると、丁寧に手をついて挨拶をした。岷山は、昼間最も熱心だった小柄な婦人と視線が合い、なにか惹き合うものを感じ

じてあわてて視線をはずした。薄暗い灯火のためか、夕食に少し酒でも入ったためか、あるいは風呂上がりにだったのだろうか、上気したようにほんのりと頬が染まっっていて、昼間見たときよりも三人とも色気がある。岷山は思った。宿の主人は三人を置いて、すぐにさがっていった。

婦人たちは、邪魔にならないようにと離れたところから岷山の仕事を見守る。部屋の中はしんと静ま

り返つて、岷山の筆が紙の上を走る音とときおり岷山がもらす大きな息だけが人のけはいを感じさせていた。岷山は、自分から話すことも特になかったので、婦人たちが何か話しかけてきたらそれをきつかけに手を休めて、聞きたいといっていることに答えるつもりでいた。もともと岷山は自分から相手の機嫌をとるといったことをしない人であつた。しかしこのとき岷山は、例の婦人が何か話しかけてくれる

のを心待ちにしていたのだった。しばらくたつてから、もう遅いからと囁きあうのが聞こえたが、熱心な婦人はもう少しだけと行って岷山の手元を見続けるのだった。

とうとうその夜は最後まで何の話もせず三人は帰っていった。ただ帰り際に、明日も写生に出るのですかと尋ねた。岷山は天気さえよければ五重の塔のあたりで描くつもりだと答えた。尋ねたのはもち

ろん熱心な婦人だ。昼間にも同じ質問のやり取りがあつたのだが、婦人は念を押したかつたのだらう。

結局その夜岷山が顔を上げて婦人たちの姿を見たのは、三人が部屋に来たときと帰るときだけであつた。それでも岷山は、あの熱心な婦人に昼間にもまして強い印象を受けた。岷山は床に入ってから三人の婦人のことを思い出そうとすると、一度だけ視線の合つたあの熱心な婦人の深く見つめるような目だ



けが浮かんできて、他の二人がどんな顔かたちだったのかまったく思い出せないのだった。

翌朝、雲一つない秋晴れの中を岷山は写生に出かけた。あの婦人に会えると思うと、ついうきうきした気分になってしまふのだった。昨夜は写生の場所を聞かれただけなのに、まるで会う約束をしたような気持ちになつていた。

その日は千畳閣や五重の塔のあたりから回廊を見おろしたところを描くつもりだったが、出かけるときに渡しの棧橋付近の賑わいを見て、一枚描きたくなつた。岷山は、あまり人物を描くことはなかつたのだが、このときは何故か何もかもが生き生きと見えて、普段画題にしないものにまで絵心を誘われたのだ。ところが場所を決めて準備にかかつてから、あわてて出しかけた道具をしまつて五重の塔に急い

だ。そのとき、あわてるあまり筆をばらばらと道端に落としたほどである。婦人たちが五重の塔に行つたとき、自分がそこにいなかつたらどうしようという思いに急かされたのだ。

岷山が五重の塔に着いたとき、婦人たちの姿はなかつた。岷山の姿がないのでどこかに行つてしまつたのだらうか。しかしそれにしては早すぎる。岷山は落ち着きを取り戻して、写生を始めた。初めのう

ちは、いまにもあの婦人たちが現れるのではないかと、写生に気が入らなかつたが、そこは熟達の画人、知らず知らずに絵の中に没頭していくのだつた。

どれくらい経つただろうか、ふつと息を吐いたとき、岷山はうしろに人のけはいを感じた。前の日のように三人で囁きあう声もなかつたので気がつかなくなつたのだ。岷山はすぐにでも振り返りたかつたのだが、それではいかにも待つていたように思われ

そうだったの、気付かないふりをしてそのまま写生を続けた。絵に没頭しているところをあの婦人に見せたいとでも思っているような自分のわざとらしさが少し不快であった。しかしそれからは、うしろのことばかり気にかかって、写生に集中できない。しばらくして、岷山は何気ない風を装って振り返った。そこには、あの熱心な婦人一人が立っていた。岷山はいま初めて気がついたように少し驚いたそぶ

りで挨拶した。岷山はそうしながらもまた、そのように不自然な自分の態度を後悔するのだった。婦人はそんなことにはおかまいなしに、ぎこちなくなっている岷山の気持ちを解きほぐすような優しい笑顔で挨拶を返した。

自分にはかまわず続けてくださいという婦人の言葉に、岷山は絵に戻った。婦人はこのときも昨日同様非常に熱心に見ているのだった。やがて、一段落

して昼休みというとき、岷山は婦人に一緒に茶屋で昼飯を食べないかと誘った。自分でもその咄嗟の積極性には驚いたほどだった。しかし、婦人は友人たちと約束しているからと、岷山の申し出を辞退した。しかし、婦人は午後の予定を岷山に尋ねた。誘いを断られて、もうこれで婦人とは会えなくなるのかと思っていた岷山は喜んで、午後は少し場所を変えて写生を続けることを伝えた。

昼飯の間も、午後写生を始めてからも岷山は婦人のことばかり考えていた。婦人がなかなか現れないので、場所がわからないのではないかと思ったり、仲間の婦人たちともっと面白いところに出かける話  
がまとまって、午後はもう来ないつもりなのかと思  
ったり内心穏やかではなかつた。よく考えてみれば、  
婦人は岷山の午後の予定を尋ねはしたが、必ず来る  
と約束したわけではない。それでも岷山は、あたり



を見回したりはしなかった。きよろきよろしているところを婦人に見られたくなかったからだ。

だが婦人はやって来た。今度は足音に岷山も素直に振り向いて笑顔を交わした。そして、初めて岷山のほうから話しかけたのだった。

岷山は、婦人がなぜそんなに自分の絵に関心を持っているのかを尋ねた。やはり婦人は絵を習ったところがあるのだった。岷山の絵が自分の習った画風と

とてもよく似ているので特に関心が湧いたという。岷山が誰に習ったのかを尋ねると、長崎で清の画人の弟子という人から学んだ人物だという。岷山自身、清の画人宋紫岩の弟子である宋紫石を師としているので、もしかしたらこの婦人が習ったという人物を自分も知っているのではないかと思つた。

長崎まで出かけて行って絵を学んだという婦人の師は、婦人の在の隣村のある豪農の息子で、名を七

左衛門といい、長崎から戻って地元で画塾を開いて  
いるということであつた。岷山は七左衛門という名  
には聞き覚えがなかつた。婦人は、七左衛門の長崎  
での師の名前を思い出さなかつたので、岷山の師と  
のつながりはわからずじまいであつた。

当時は、長崎で清の画人に教えを乞うことは盛ん  
に行われていて、絵を志すものが大勢長崎へ、長崎  
へと出かけていた。だから長崎というだけで名前が

わかるというものでもなかつた。

婦人は、この巖島の対岸の山を幾つか越えた山間にある上伏谷（かみふしだに）という村の庄屋の妻で、名をユキといい、年は四十だということまで何のためらいもなく会つたばかりの岷山に話すのだつた。

このたびユキは、村の組頭の妻センと、その妹ハマの三人で巖島見物に来ていたのだ。初めの予定で

はこの日に帰るはずだったのに、ユキがどうしてももう一日岷山が写生するところを見たいといい張つて帰宅を延ばしたのだった。

この日岷山は、ユキとの話にすっかり時間をとられてしまつて、やつとのことで予定の写生をすませた。そしてユキと肩を並べて宿に帰つたのだった。帰り道でユキは、また翌日の岷山の予定を尋ねた。岷山は、翌日は島の北側にある包ヶ浦（つつみがう

ら)で写生する予定だったので、そのことをいうと、ユキは一緒に行きたいがこれ以上帰宅を延ばすわけにいかないし、連れれの二人も承知しないだろうからとしきりに残念がる。包ヶ浦は、峠を越して一里も行かなければならない浜辺で、人気のない寂しいところだ。だから一緒に行くのは無理だと岷山がいつでも、思い切ってもう一日帰るのを延ばしてしまおうかといったりするのだった。岷山は、そういうユ

キの言葉が嬉しかった。

岷山は、藩命を受けて仕事をしているのだから、日数も藩に申し出た予定に従ったもので、ユキがついてくることを喜んでばかりもいられない。だからこのときは、ユキと一緒にいきたいといってくれたことで満足するしかなかった。

この日の夜、ユキたちは岷山の部屋に来なかったが、昼間ユキと過ごしたことで、岷山は満たされた

気分でいることができた。そして心の隅では、翌日ユキが万が一にでも包ヶ浦までついて来ることを心の隅で期待してみたりするのだった。

さて、翌朝早く岷山が出かけようとしているところに、宿の奥から例の三人が何事かいい合いながら出て来た。一人がいきなり岷山に尋ねた。そのいいかたが怒ったような調子だったので、岷山は一瞬何



事かと思つたが、

「今日遠いところに行かれるのに、先生はこの人が一緒に行つてもいいとおつしやつたのですか」  
ハマという、妹の方だ。すぐにユキが今日の写生に同行したがって、そのことで三人がもめていることが飲み込めた。岷山は、『一緒に行つてもいい』とはいつていないのと思つたが、ユキがそんなことをいつてまで行きしたがっているのを知つて、

「三人ご一緒にどうですか」

とその場の思いつきでいった。すると、三人でまたいい合いが始まった。峠を越してそんな遠くまで歩くのは嫌だとか、いくら何でもこれ以上帰宅を延ばすわけに行かないなどといっているのが断片的に聞こえてくる。しかし、そういつたいい合いを制するようユキが、

「私はまいります」

といい切ったのだ。そのいい方があまりにも決然としていたので、あとの二人はそれ以上ユキをとめようとはしなかった。そしてハマが、

「でも、あしたは絶対に帰るのですよ」

とユキに向かつて、ただっ子を諭すように少し厳しい調子でいった。ユキは岷山に、

「見苦しいところをお見せしてしまいました。そういうことなのですが、決してお仕事の邪魔にならない

いようにしますから、お供させてください」とあらためて頼むのだった。

結局、ユキは岷山と包ヶ浦に行き、残った二人はもう一日巖島見物をする事になったのだ。

裕福な家の婦人たちの優雅で気ままな生活ぶりがかがえるが、彼女たちにとっては何年に一度もないような、羽を伸ばす日々なのだ。

出かけるとき、センとハマが二人をひやかすよう

に見送った。岷山はそういった軽口には応じなかったが、悪い気はしなかった。

岷山とユキは、その日一日二人だけで包ヶ浦の広い浜辺で過ごした。二人は道すがら絵についてたくさん話をした。岷山は、ユキは絵についてとてもしつかりした考えを持っていて、単なる裕福な家の婦人の手慰みとは思えない精進ぶりであることを知

った。ユキは、自分の絵は南蘋派（なんびんは）だと岷山にはなした。そのころ絵の世界では、清の画人沈南蘋（ちんなんびん）やその弟子たちの影響を強く受けて、新しい画風が流行していた。南蘋派と  
いうのは、その流れを汲んだ画人たちのことだが、  
当時は多くの者がそれに似たような画風で描いていたのだ。そして見立てどおり岷山自身もそのひとりだったことを知って、ユキは小躍りするようにして

喜んだ。

岷山はユキが話すことを真面目に聞き、その知識や考え方にいちいち感心するのだった。岷山ほどの専門家からみれば、ユキの話す絵の知識は珍しいものでもなんでもなかったはずだから、ユキが一生懸命話すその姿に心を奪われたのだということだろう。岷山は、目を輝かせて話すユキはとても美しいと感じるのだった。

包ヶ浦写生の一日は、岷山にとって生涯忘れられない日となつたが、一方ユキにとっては人生を変へることになる一日だったのである。といつても、草紙などに出てくるような色事めいた出来事とはまつたく無縁の二人の一日であつた。

ユキは、岷山が写生している間、話しかけることもなく、邪魔にならないようにうしろの方から、筆の運びを見ているのだ。ユキから見ると、岷山の筆



の先から生まれ出る絵はまるで魔法のように見事な形と雰囲気を湛えているのだった。

この日岷山は一か所にじっと座って描き続けたわけではない。広い浜辺を歩き回り、時には小高いところからそのあたりの様子をくまなく観察する。岷山が動き回るときには、ユキもついて動き回った。岷山は観察がすむとようやく絵筆をとる。描き出される絵は、人の視界には収まりきらない広い範囲を

捉えたものとなるのだった。それを見たユキは、まるで沖で輪をかいているとびの目で見たようだと岷山にはなすのだった。岷山は、ユキのこの『とびの目で見たような』という表現にもいたく感心してしまふのだった。

休憩になるとユキは岷山のために茶を注いだり、弁当を開いたり要領よく立ち働くのだった。といつても岷山は宿に用意させた弁当を持っていたが、ユ

キは急に岷山に同行することがかなったので何の準備もなかった。岷山は自分の物を半分ユキに分けて、二人は仲睦まじそうにそれを食べたのだった。岷山はまるでかわいい助手を得たような気分だった。岷山はユキのかがいしいその姿が抱きしめたくなるほどいとおしかった。もちろん抱きしめたりはしなかったのだが。岷山はユキのことをしばしば『かわいい』と感じるのだが、そのような言葉をすでに四

十を過ぎた婦人に当てはめるのがふさわしいのかどうかとはともかくとして、ユキには岷山にかわいいと思わせるような天真爛漫さがあつたのだ。

ユキは邪魔にならないように気を使いながらも、時間が経つと慣れてきて、どうかすると描いている岷山の肩に袂が触れるくらい近くで見ることもある。袂が触れることがあつても、二人とも気がつかない風を装つてそのままにしていた。

途中で一度岷山が、

「あなたも一枚描いてごらんなさい」

といつて紙と筆を渡すと、ユキは岷山が描いた絵を真似て、慣れた筆の運びで入り江の景色を描いた。しかし、そばで見ている岷山の視線に照れて、それ以上は描こうとしなかった。

岷山は、その僅かな筆跡だけでユキには才能があると直感したのだった。

この日ユキは、初めて岷山自身のことを尋ねた。

岷山は藩に仕える絵師で、このたびもその仕事でこうして写生して歩いていることを話した。それを聞いたユキは驚いて、知らなかつたとはいえ、こんなところまでついて来たことを恐縮するのだつた。岷山が、仕事にはまつたく差し支えないから気にしないでいい、むしろ自分も楽しくて仕事も捗つたといふと、ユキは安心したように頷くのだつた。

岷山は、ユキが年を隠さずにいったことを思い出して、自分はもう五十九才だといった。

それにしても岷山は昔から、自分のことを愛想も何もない堅苦しい人間だと思っていたのだが、ユキからは人懐こい人物に見えたのだらうかと、少し不思議な気持ちになるのだった。

岷山は、もしかしたらユキは自分の指導を受けたいと考えているのかも思えないとも思った。

ユキたちは次の朝早く上伏谷村に帰っていった。

巖島を朝一番の渡しに乗れば、駕籠を乗り継いで夕方には家に着くことができる。岷山がその日の写生に出かけるときには、もう三人は発ったあとであった。



## 弟子入り

広島に帰ってからもしばらくの間、岷山はユキのことばかり考えていた。何かしていてもすぐにユキの姿や、落ち着いた話し声が浮かんできてしまうのだ。ふっくらとした頬、着物の袖から出ている真っ白い腕、小柄で引き締まった着物の腰の辺りまで思

い出してしまふのだった。もちろん若い娘のはちきれんばかりの初々しさとというものではなく、髪には二、三本白いものさえ見えていたが、それでも表情や動作それに話しぶりの生き生きした様子やかわいさは、顔かたちの印象が薄れてきたずっと後になつても、いつまでも忘れられなかつた。

岷山は絵師としての仕事に加えて、弟子の指導も

あり忙しい毎日を送っていた。

巖島から半年くらい経った翌年の春、岷山は一通の手紙を受け取った。差出人は上伏谷村庄屋竹内甚九朗（じんくろう）となっている。そのころはもう岷山もそれほどユキのことばかり考えていたわけではなく、たまに思い出すとといったくらいだったのだが、上伏谷村庄屋の名を見てそれがユキの夫であることはすぐにわかった。岷山は、巖島のときの情景

をまざまざと思い出すのだった。

手紙には、巖島では妻ユキたちが大変お世話になったにもかかわらず礼状も出さなかつた非礼を詫びたあと、ユキがそれ以来憑かれたように絵を描いていること、そしてできることなら先生のご指導を賜わりたいと願っており、自分としてもその希望を叶えてやりたいと思つて、一面識もない先生に失礼とは知りながらお願いの手紙をしたためたとある。決

して達筆とはいえないが一生懸命に書いたと見える筆跡であつた。

岷山は、ユキが自分の指導を望んでいることを知つて胸の躍る思ひであつた。巖島で予感したことが当たつていたので。岷山は手紙を読みながら、つい口元が緩んでしまひ、それを周りの者に気取られないよう平静を装うのに苦勞した。

しかし、ユキに絵の指導をするといつても、遠隔

の地にいる者にどうやって指導したらいいのか妙案はすぐには出てこない。岷山は、なんとかかして引き受けたいが、指導の方法などを少し考えてから返事をすると甚九朗宛に書き送ったのだった。

これを是が非でも実現させたいと思った岷山はいろいろ考えた末、ユキの絵を手紙として送らせ、それを岷山が添削して送り返すという方法を思いついて、早速ユキに手紙を書いた。岷山としては、直接

ユキ宛にしたかったのだが、それもはばかられたので、宛名は『上伏谷村庄屋竹内甚九朗殿』としたのだった。

岷山は、絵の指導というものは直接絵筆を持って傍について行わなければ実を挙げる事ができないと、常々いつていた。岷山の教えを受けたという者はあとを断たなかったが、公務の合間に自ら手をとって指導できる人数は限られている。岷山の場合、

自分が仕えていた藩主重晟自身も弟子の一人とあつて、一般の人々は希望しても、弟子にしてもらえないのはよほど幸運といわねばならなかつた。だから、岷山の方から指導したいというのはかなり異例のことであつた。

昨今のように猫も杓子もやれ茶道だ、書道だ、画道だと騒がしい世の中では、何人もの弟子を一堂に集めて指導し、高い指導料を得ている自称大先生た



ちが市井には少なくなないと聞くが、岷山の考えはそれらとは相容れないものであつた。このような誠実さのために、岷山の指導を受けた者には優れて腕を上げるものが多かつた。

こんなこともあつた。藩の中に絵を学びたいという足輕がおり、長年岷山に弟子入りを願つていたが、なかなか実現しなかつた。それでも諦めずに願いつづけて五年目にやっと弟子になることを許されると

たちまち腕を上げて、やがて彼は岷山の手伝いをするまでになり、遂には藩の絵師にまでなったというのである。この男こそ後にこの物語に出てくる六之助である。

とにかくユキの絵の指導はこのようにして始まることになった。岷山の中で薄れかけていたユキへの思いが、再燃し始めた。岷山はユキからいつ絵が届

くかと首を長くして待った。

絵を送るようにといいう手紙を出してから二か月もしてから、やはり甚九郎の名で手紙が届き、中には絵も同封されているようだった。まるで恋文でも開けるときのようにときめきを覚えながら岷山は細心の手つきで包みをほどいていった。

しかし、目の前に現れた絵を見て岷山は現実に引き戻された。それらは誠実かつ丹精こめて描かれて

はいたが、岷山に感銘を与えるには程遠いものだったのだ。

それでも岷山は、それで当たり前なのだと思います。そして、それらの絵の添削にとりかかった。たしかにユキが自分でもいつていたように、それは南蘋風といえる技法で描かれているのだが、構図も筆の運びも稚拙なものであった。ただ岷山がほほえましく思ったのは、一枚の絵が、ユキのいうとびの目といっ

た手法を取り入れたと思える描き方になっていたことだった。それは山並みを写生したものだ。連なる尾根のむこうに富士のように形のよい山が描かれている。それぞれの山や川、木などはまあまあ描けているのだが、風景全体が大地に根をおろしている感じがなく、ひどく安定性を欠いている。

岷山はそれから何日かの間、送られてきた絵を取り出しては眺めた。そして、気付いたことを細かく

書き付けていった。岷山はこの作業が、目の前にいる弟子にあれこれいって聞かせる場合よりも、指導者としてのしつかりした視点が求められるものだということに気付いた。どういうつもりでそのように描いたのかを尋ねるわけにもいかないし、自分のいいたいことを間違ひなく相手に伝える言葉を使わなければならぬ。岷山は、ユキが正しく受け取ってくれるように注意深く指導の言葉を選んだ。

岷山は、ユキがいうとびの目で描いた風景と同じ構図の絵を手本になるように一枚描き、送られてきた絵には、それぞれの絵についての気付きや、描くときの注意などを書き付けたものを同封して、甚九朗宛に送り返した。岷山は、その数日間ユキの絵の添削にかなりの時間を割いたのだった。

その作業をしながら岷山は、絵のどこかにユキの書いた言葉がないか探した。そんなものはあるはず

がないと思いながらも、どこか隅の方にほんの一言でも、ユキが岷山にそつと耳打ちするような言葉を期待したのだった。いくら探してもそのようなものはなかった。

さらに三月くらいして、ユキから二度目の絵が送られてきた。やはり差出人は甚九朗となっている。絵は十枚ほどもあり、どれも一生懸命描いたもので



あることが岷山にはよくわかった。前回の指導に忠実に従った跡もありありとしていた。しかし今回も一枚として岷山の心を動かすような絵は無かった。岷山がいうには、絵というものは学ぶことによつて表現の技術を身につけることはできるが、描いた絵が人の心を打つかどうかは、最初から未熟なりに絵の中に表れるものなのだ。それが見られないということとは、ユキの絵にはもともとそういったものが無

いのかも知れないと岷山は思い始めた。包ヶ浦で垣間見たように思ったユキの才能は、岷山の思い過ぎしだったようだ。岷山は失望した。あの胸のときめくような女性にふさわしい、なにか訴えかけるものをユキの絵に期待していたからだ。でもそれは岷山の勝手な思い込みで、世のたいていの人たちは、たとえ人の心を打つような画才がなくても、描く楽しみを求めて絵を描くことはいっこうに構わないわけ

だから、それでユキを責めることはできない。またユキがそのような天分を持っていないからといって、岷山が自分から求めるような気持ちで引き受けたユキの指導をすぐにやめるといふわけにもいかなかつた。

二度目に絵が送られてきてからほどなく甚九郎からの手紙が届いた。それには、ユキがどうしても一

度直接先生にお会いしてご指導を受けたいといつて  
いるのですが、そのような勝手なお願いにご都合を  
つけていただけるものでしょうかと、例によつて一  
生懸命書いた字で頼んできたのだ。そして、もしそ  
のようなことが許されるなら先生のご都合に合わせ  
てユキを伴つて広島先生のところに上がるので、  
知らせてほしいというものであつた。

会いたいという気持ちは岷山にもあつたが、絵に

ひらめきを感じ取れないことで、岷山はユキに絵の指導をすることの楽しみを失いかけていた。そして、絵の魅力と同じように、あれほど輝いて見えたユキの魅力も岷山にとってはやや輝きを減じはじめていたのだった。それでもこうして熱心に頼んで来たのだからと、岷山は都合のつく幾日かを知らせてやった。

一月ほどたったある日の午後、ユキは甚九郎に付き添われてやって来た。岷山が初めてみる甚九郎は、手紙の字から想像したとおりのいかにも好人物そうな風貌であつた。そしてかわいくて仕方がないとてもいうようにユキを気遣いながら岷山の前に進み出て、丁寧に挨拶をするのだつた。ユキは巖島での、のびのびした様子とは違つて甚九郎のうしろでかしくまっている。

甚九郎は庄屋としての日ごろの苦勞や、自分も絵や書には関心があるのだが、忙しくて手にすることできないのが残念だなどと長々と話したあと、ようやく絵を見てやってほしいといつてユキを促した。岷山は話の長さにしびれを切らせながらも、笑顔で愛想よく話しつづける甚九郎の人柄に、途中でさえぎる気になれなかった。

促されて、ユキは膝で前に進み出ると、持って来

た絵の包みを開き始めた。そして岷山の前に広げられた大小十枚ほどの絵は、それまで二度送られてきたものとは全く違うものであることが、岷山には一目でわかった。岷山は身を乗り出してそれらを一枚一枚手にとって見るのだった。いったいどういうことなのだ。まるでこれまでの絵とは別人が描いたようではないか。

岷山はしばらく丁寧に絵を見てから、これまで送



られてきた絵とずいぶん感じが違うがどうしてなのかとユキに尋ねた。ユキは岷山がいつていることがよくわからないらしく、一瞬困ったような表情を見せた。すぐに甚九郎が横から代わって事情を説明した。それによると、せつかく先生から絵を送るようになされたのに、ユキはいつまでも先生に見てもらえるような絵ができないというばかりなので、自分が勝手に別人の絵を送ったというのだ。絵を見

てくださるといふ先生に対して、何か月も何も送らないのでいても立ってもいられなくなつてそんなことをしてしまつたと、畳に額を擦り付けるようにして謝るのだった。これまでに二度送つてきた絵を描いたのは、同郷のハマという婦人だったのだ。巖島でユキと一緒にいた中の一人で、同じ村の組頭久四郎の妻センの妹だ。岷山もハマという婦人のことを思い出した。巖島で会つた三人の中ではもつとも活

発そうな女性だ。包みが浦にユキを連れて行くと約束したのかと岷山に食って掛かった婦人である。甚九朗はハマに口止めしていたので、そのことをユキは全く知らなかつたのだ。

岷山は、いかにも人のよさそうな甚九朗がおろおろしながら岷山に断られないようにとしたことを憎む気にはなれなかつた。それと、かえつてあの絵がユキのものでなかつたことにほつとしたくらいであ

った。ユキが携えてきた絵は岷山の心に響くものばかりだったのだ。だから、怒るどころか岷山は嬉しくて仕方がなかった。しかし、そこはもつたいぶつた風を装って、ユキに相對した。ユキは知らないこととはいえ、夫がしたことを恥じて、岷山に深々と頭をさげた。そして、

「それでも、まだ私の絵を見ていただけるでしょうか」

と蚊のなくような声でいうのだった。甚九朗もユキと一緒にまた頭をさげて、

「私の一存でしたことで、これのまったく知らないことなのです。どうか今日だけでも指導してやってください」

と泣き出さんばかりに頼むのだった。岷山の方は、ユキの絵を一目見てすっかり気に入っていたものだから、

「いやいや、甚九朗さんも悪気があつてしたわけではないのですから、どうぞ気になさらないで下さい。ハマさんとおっしやるのですか、その方なら私も巖島でお目にかかっていますから、何かのご縁でしよう。それにこれらの絵はとても素晴らしいので、私も嬉しいのです」

と寛大なところを見せるのに苦労はなかつた。

ハマの絵が送られたはなしは岷山にとってより、

むしろユキにとって気がかりなものだった。近くに  
住み、親友として隠し事一つない間柄だったはずの  
ハマが、何か月もの間自分の夫と秘密を共有してい  
たということを知ったからだ。でもこのときは、こ  
れから岷山に初めて自分の描いた絵について指導し  
てもらおうところだったので、そんなことにこだわっ  
ている場合ではなかった。

ユキの描いてきた絵は、画風は勿論だが、絵の雰

困気も岷山の描く絵とよく似ていた。それは巖島で岷山の絵に触れてからそうなったのか、もともとそのような絵を描いていたのかはわからない。巖島で別れてから半年の間ユキは憑かれたように絵を描いていたと、甚九朗は岷山への手紙のなかに書いていた。それでも岷山に見せるに値すると思える絵が描けるまでには半年以上の日々が必要だったのだ。これまで二回岷山が添削した言葉、実はハマが描い



た絵に対するものだったのだが、それらをユキは全く知らなかつたということになる。それにもかかわらず、ユキの絵には岷山がさらに添削しなければならぬような欠点はなかつたのだ。それどころか、岷山はユキの絵に自分にはない瑞々しさを感じさせました。

岷山は、添削や手直しではなく、それぞれの絵に対する自分の感想を一枚一枚裏書し始めた。ユキは

それを、頬を紅潮させてじつと見守った。

岷山が時間をかけて評を書いている間に、甚九郎が一度席をはずした。厠にでも行つたのだらう。それまで終始無言で岷山の手元を見ていたユキが、少し身を乗り出すようにして、

「直接見ていただけで嬉しいです」

といったのだ。岷山はその言葉を、絵を見てもらえて嬉しいという意味だけではなく、会えて嬉しいと

いう風にも受け取った。なぜなら、ユキはこうもいったからだ。

「次に絵が描けたら、またこちらに上がらせていただいてよろしいでしょうか。こんどは私一人でまいります」

そのとき席をはずしていた甚九朗が戻ってきたので、ユキは先ほどまでと同様に、かしこまって岷山が評を書くのを見守るのだった。

絵の評がすむと、茶が運ばれてしばらくくつろいでからユキと甚九朗は帰って行つた。帰つたといつてもその日は広島の旅籠に泊まつて、翌日上伏谷村まで旅をするという、ユキたちにとっては二日がかりの大仕事だつたのだ。岷山はユキの絵を一枚だけでも手元に置きたいと思つたのだが、なんとなく甚九朗の手前いい出しにくくて、そのまま全部持ち帰らせた。師として、弟子の絵を一枚置いていけとい

うぐらい当たり前のことなのだが、岷山は自分がユキのものを欲しがっていると思われることを意識しすぎていたのである。

岷山は、ユキの言葉を何度も思い返してみた。『一人で』といったのは、遠い山道を女一人で伴もなしでとは考えられないので、夫と一緒にではなくという意味に違いない。この日のユキの様子はあまりにも巖島のとちがっていった。あのかしこまった態

度は、岷山の前で絵を見てもらう緊張からだけではなく、傍に夫甚九朗がいるからだ」と岷山は思った。

岷山は、自分と同じようにユキも自分に憧れを抱いているのではないかという思いが捨てきれないのであつた。

『次に絵が描けたら、．．．』というユキの言葉にもかかわらず、それからは毎月のように、例によ

つて甚九朗が差出人の手紙の中に二、三枚の絵が同封されてきた。実際、上伏谷村から広島まで出て来るのはそう簡単なことではなかつたからであろう。絵は間違いなくユキの描いたものであつた。それらの絵の多くは山を遠近に取り入れた風景画だつた。あのハマが描いたという絵にもあつた富士に似た形の良い山を描いた絵もあつた。それはハマの描いたものと構図などは似ているのだが、技術の上で優れ

ているだけでなく、描いた者が風景から受けた感動がそのまま見る者に伝わってくる絵となっていた。岷山はいつもその点に驚きを禁じえなかつた。

また、視界には入りきらなような広い範囲を一枚の画面に納めた、とびの目で描いた絵もときどき含まれているのだつた。とくにこのころは雪景色を描いたものに岷山の心を強く捉える絵が幾つかあつた。ユキの住む上伏谷村は、広島に比べると雪の多



いところのようである。岷山はユキの絵を見ながら、そこに描かれている風景を自分も実際に見たいと思うようになるのだった。

岷山は、どこをどう直しなさいといったことではなく、それぞれの絵に対する自分の感想を裏書して送り返すのだった。そのとき書く内容は、純粹に絵に対する事柄だけになるよう心掛けた。ともすると、絵を通じてユキと対話しているような気持ちに駆ら

れて、ユキに書き送りたいことが心に溢れるのだつたが、甚九朗の目にも触れることを考えて、厳に書く手を戒めたのであつた。

そのようなやりとりがしばらく続いたが、岷山は年が明けてから半年くらい、仕事で江戸に行つていた。藩の江戸屋敷の改修に伴つて、幾枚かの屏風を描くことと、庭園の造作をする仕事である。江戸で

岷山は忙しい公務の合間をみて、著名な画人を訪ねて自ら教えを受けたりもしたのだった。

江戸にいる間もユキのことを忘れてはいなかつたが、大変な忙しさの上、遠く離れていて絵のやり取りもないので、ユキのことに気を取られることもなく過ごした。

無事任務を終えて帰国するとき、岷山は密かにユキのために江戸で流行っている亀甲に蒔絵を施した

櫛を買い求めて懐に忍ばせた。岷山はこのような女性  
の持ち物に詳しくはなかつたので、あまり装飾品  
で身を飾ることをせず、化粧もごく薄いユキが喜び  
そうなものを選ぶのに苦勞した。しかし、それらの  
形や施されている模様の良し悪しにはさすがに鋭い  
鑑識眼を發揮したのだつた。もちろん自分の女房や  
孫たちへの土産も忘れなかつた。孫はともかく、女  
房にそのようなみやげ物を持ち帰るなど、かつて無

いことだった。このときは買わないわけにはいかないと思つたのだ。

広島に帰ると、例の甚九朗の字で手紙が来ていた。ユキの絵も入っているのだらう。しばらく広島を留守にすることは知らせてあつたので、帰国するところを見計らつて送つて来たものとみえる。

しかし中に絵はなく甚九朗の手紙だけだつた。そ

れには、江戸からお帰りになつたばかりのお忙しい先生にはまことに申し訳ないのですがと断つた上で、再度お目にかかつて絵を見てもらいたいというユキの願いをきいてやつてもらえないかという依頼であつた。岷山は、すぐにでもと返事したい気持ちを押しさえて、帰藩直後の忙しさが一段落したいついっにおいでいただききたいと、周りのものからみて不自然でないような時期を指定したのだつた。

ユキが描きためた絵を携えて岷山を訪ねたのは、晩秋のある午後だった。今回も甚九朗が付き添って来た。岷山は、庄屋ともあるものが、女房の習い事にいちいちついて来なくても、使用人を伴につけて出せばよいのにと、少々鬱陶しく思うのだった。前回、ユキは、次は一人で来ると耳打ちしたではないかと思うのだった。岷山はユキに、どうして一人で来なかつたのかと尋ねたいくらいだったが、甚九

朗はひとときも席をはずさなかつたので、その機会はなかつた。もちろん江戸土産の櫛をユキに手渡すこともできなかつた。

帰りがけに岷山は、これからは当分城内の庭園の仕事をするので広島を留守にすることはないから、いつでも来たいときに来てかまわないといい送つた。そして二人を、自分が改修に取り掛かるといふ縮景園を案内した。これから改修するといつてもすでに



立派な庭園で、紅葉の美しさがユキたちの目を惹いたのだった。

三回目の来訪は意外に早く、一月後にはやってきた。今度は甚九郎ではなく、年配の男と女の二人の伴に付き添われて来たのだった。絵の指導の間、男は別の部屋でくつろいでもらったが、女のほうはユキの傍を離れず、甚九郎と同じように最後まで部屋

の隅にじつと座っているのだった。

この日もユキと岷山は絵の話以外は何もせず仕舞いであつた。絵の話といつても、話といえるほどのものではない。岷山があれこれ絵についていうのを、ユキがただ「はい」、「はい」と頷きながら返事するだけなのだ。途中で一度、ユキが付き添いの女に、長くかかるからお庭でも見せてもらつたらどうかと促したが女は、自分は庭よりも絵に興味があるから

といつてそこを動かさなかつた。岷山はこの女のことを、まるで監視人のようだと思つた。

岷山はこのようなユキの指導に疲れを感じるようになりはじめた。たしかに、ユキは岷山の指導によつて、表現の手段をどんどん身につけてそれを絵に生かしていくのだつたが、岷山がユキと話したかつたのは、ユキの絵のあふれるような精気についてだつたのだ。それを話すには、ユキがのびのびと自由

な気持ちにならないと無理なのだ。だから監視人がいるところではいい出しにくかったのである。巖島でのように、お互い自由に考えをいいあつてこそ、実のある指導ができるのに、これではまるで弟子が先生に叱られているようではないかと岷山は思うのだった。岷山はこのやり方をこれ以上続けるのは苦痛でさえあると思うようになっていた。かといつて、ユキの指導を断ってしまいたくはなかった。

## 探勝旅行

岷山は藩の絵師に任ぜられてからさまざまの仕事に携わってきた。それらのなかに藩内各地の景勝地や瀑布、山、草木などの調査と行ったことも含まれている。ちようどそのころ、広島府の北方七里の都志見村にある駒ヶ瀧のことが評判になつていて、藩主

から一度調査をするようにいわれていたのだった。駒ヶ瀧は広島からは北の方角なので、はじめ岷山はユキと関連付けるようなことは思いつかなかつた。ただ、駒ヶ瀧を調査するついでにその付近の景勝地をいろいろ回つたらどうだろうかと考えた岷山は、その範囲を思い切つて広げることの思いついたのだ。それは、以前藩東部の瀑布を調査して歩いたことがあつたのだが、それと対になるように今度は藩西部

の瀑布や景勝地を回るといふものだ。そこまで考えた岷山は、ユキのいる上伏谷方面をその範囲に入れることができるとに気付いた。一旦そう思い始めると、岷山のなかではその考えが動かさない絶対的なもののようになつていった。広島藩の西の端にある景勝地といえは厳島だが、あまりにも名高い厳島は、岷山自身たびたび訪れているので、むしろまだ行つたことのない山間部の探勝を考えた。岷山は考

え抜いた末、駒ヶ瀧調査をうまく組み込んだ一計を編み出した。

それは広島から海岸沿いに西下し、五日市辺りから山間部に入って和田村の湯ノ山温泉、多田村の湯来（ゆき）温泉、筒賀（つつが）村の龍頭峡（りゅうずきよう）、加計（かけ）を経て都志見村の駒ヶ瀧を見てから、太田川を舟で下って広島に帰って来るというかなり大掛かりなの計画だ。



広島藩西部地域の瀑布および名勝を調査して、それを絵と紀行文にまとめるといふ岷山にしては初めての試みも取り入れた。最終目的地を藩主にいわれた駒ヶ瀧とし、それを最大の眼目としてこの計画が首尾よく許可されるように工夫したのだつた。

工夫の甲斐あつて計画は藩主に気に入られてすぐに了承された。そのために十日間程度の休暇を取らせるといふところまでとんとん拍子に進んだ。しか

し実際には、岷山自身に当面やらなくてはならない仕事山積して、その計画をいつ実行できるかという見通しはなかなかつかない。それでも岷山は仕事の合間に、行程をあれこれ考えて計画を具體的なものにしていった。

藩主は、岷山が巡ろうとしている道筋に、和田村の湯ノ山温泉があることを知って、そこは藩指定の湯治場として代々の藩主が入湯している温泉であり、

宿もたくさんあるからぜひ利用するとよいといつてこの計画を後押しするのだった。岷山にとっては追い風といつてよい。

岷山はさらに細かな旅程を作り始めた。岷山がこの計画で頭を捻つたのは、上伏谷村を道筋になるようにするといふ点である。いふまでもなく上伏谷村は庄屋甚九朗の妻ユキが、岷山に触発されて憑かれたように絵を描いている土地である。

こういう場合の休憩所や宿泊所は旅館か、それがない場合は村役である庄屋の家になることが通例であつた。したがつて岷山はごく当たり前のこととして甚九朗のところを宿泊所にすることができる。しかし、それには一つ困つたことがあるのに気がついた。藩主が湯ノ山温泉に泊まることを岷山に勧めてゐることだ。なぜならユキのいる上伏谷村から湯ノ山温泉までは二里と離れていない。よほどのことが

ないと、その両方に宿泊するというのは不自然なのだ。朝早く広島を出て海岸沿いに写生をしながら歩くと、上伏谷村あたりにつくのは午後になるだろうが、その日のうちに湯ノ山温泉まで行くことはさしてむつかしくない。あるいは、絵を描きながらの旅であるから、さらに時間がかかるとなれば山間部に入る前の五日市あたりで一泊するのが妥当なところといえる。しかし、そうしてしまおうと上伏谷村に立

ち寄ることはできても、宿泊することにしてゆつくり過ごすというのは不自然になる。

結局岷山は、最初の計画通り第一日に上伏谷村まで行き、景勝地の多い上伏谷村付近で探勝や写生の時間を十分に取ることにして、それがこの旅行では大切なことであると繰り返し計画の中で述べた。すなわち、その日のうちに湯ノ山温泉まで行くのは無理であるような計画に仕上げたのだ。岷山は上伏

谷村やその前後には見るべきところがたくさんあるかのよう、まだ見ぬ地の知らないことまで想像をたくましくしてあれこれ計画に盛り込んだ。それには、ユキが描いてきた絵が大いに役立った。現地に行ってみればそれなりに写生に値するものは何やかやあるものだ、いつもの岷山からは想像しにくいような高をくくった考え方をしたものである。しかし、計画のなかでそのような手心を加えたのは上伏

谷村のところだけで、あとはその地方に詳しい者などから情報を得ながら、岷山らしく手堅い旅程を作り上げたのだった。

上伏谷村からはむしろ情報を得ないようにさえした。現地から『特に見るべきものとして無し』などといってきたら元も子もなくなるからだ。

計画ができ上がると、途中の休憩所や、宿泊所に当てようとするところにそれが可能かどうか打診し



なければならぬ。そのためには実行する時期を決めなくてはならない。半年近くが過ぎてようやく藩主から探勝旅行のために十日間の休暇が正式に許可された。それから宿泊地などの交渉に三月以上かかり、出発にこぎつけたのは紅葉の時期に差しかけたころであつた。

その間に、ユキは先の二人の伴と二度ばかり岷山の指導を受けに来ている。

岷山は探勝旅行のことをユキには伏せていた。時期がなかなか決まらなかつたということもあるが、ユキをびつくりさせようという思いもあつたのである。

探勝旅行の宿泊地などの交渉が始められたのは、ユキが最後に岷山を訪れてからまもなくのことであつた。依頼した各所から、宿泊や休憩を喜んでお受けするといふ返事が届き始めたが、上伏谷村の庄屋

甚九郎のところからはなかなか返事が来ない。岷山にしてみれば、真先に歓迎の返事が来るものと思つていたので、返事がないことは意外であつた。他のところは都合が悪いといつてくれば、別のところを探せばいいといった気楽な気持ちだつたが、ここだけには他では困るのだ。それももし甚九郎のところは難しいというようなことになれば、誰が考えても二里先の湯ノ山温泉にすればいいということになつて

しまうに決まっている。

話が前後するが、ここで最後にユキが岷山を訪れたときのことに触れておく。それは岷山の探勝旅行の三月ばかり前のことである。一年中で最も暑い時期であった。女の使用人が部屋の隅でじつと見守る中でユキが岷山の指導を受けたのは、いつもと変わりなかつた。帰るときに、岷山が次にくるのはいつ

ごろになりそうかと尋ねた。岷山にしてみれば探勝旅行が近いうちに実現するかもしれないという思いがあつたからである。

そのころは岷山のところでの指導もだいぶ回を重ねていたので、伴の女使用人、この者の名はソエと  
いうのだが、その目があるとはいつてもユキも岷山も最初よりは気軽に会話を交わすようになっていた。岷山は、当然のごとくいついつ来たいという返事を

待った。ところがユキは、

「実は、ある事情で忙しくなるので、しばらく絵を描く暇が無くなるかもしれないのです。それが落ちて着くまではここに来られないと思います。先生に指導していただいたことは、決して忘れずに後にまた絵を描くときに生かします」

というのだ。岷山は、頭から水を掛けられたような気がした。そのときソエはユキをちらつと見やった

が、何もいわなかつた。岷山はその事情というのを  
知りたいたと思つたが、本人がいわないところをみる  
と人にいいたくないことなのだろうと思つてそれ以  
上は尋ねることはしなかつた。

探勝旅行の最後の宿泊地とした宇賀の温泉場に近  
い庄屋からも返事が届いて、あとは甚九朗の返事さ  
えあればいつでも出発できるのだが、その段になつ

ても甚九郎からは承諾の返事も、断りの返事もなかった。

岷山がやきもきしながら待つこと半月あまり、やっと甚九郎から返事が来た。ご宿泊のときを心からお待ちしておりますという文面で、いつもとかわらない甚九郎の筆であつた。文末に村のことではばらく家を空けていて、返事が遅れて大変失礼いたしましたとあつた。理由はともかく、歓迎する旨の返事



が届いたのだから、岷山は早速出発の日を定め、最後の準備を整えた。休暇という名目ではあつても、藩命を受けての仕事なので六之助という助手を伴つていくことになった。六之助は藩主が奥詰に昇格した岷山につけた助手である。それ以来ずっと岷山を助けてともに仕事をしてきた。例の巖島ときは別の仕事のために同行していなかつたが、写生を伴う旅行では持ち物も多くほとんどは二人で出かけるの

だった。

上伏谷村

岷山と六之助が広島を出発したのは十月十二日、そろそろ山の木々に秋色が混じり始める季節である。

広島を早朝に出て、草津、井ノ口と海岸線を写生しながら西下し、五日市から内陸部に入った。以下保井田、寺田、下河内と写生を続けながら宿泊地である上伏谷村の庄屋甚九朗のところまで行くというのが初日の旅程である。

道中は馬と駕籠を乗り継いでの旅だったが、それでも五日市から先の山道はたいそう難儀なものだった。若い六之助には何でもない道も、そのとき六十

二才になつていた岷山は、夜になつて甚九郎の家に着いたときには相当疲れていた。途中写生をしながらの旅なので、時間もかかるのだ。

岷山は自分が実際に上伏谷村まで来て、ユキが女の足でこの道のりを何度も広島まで通つて来たことを思い、その熱意にあらためて感心するのだった。ユキたちは午後の早い時間に岷山のところに着いていたから、朝は相当早く家を出ていたはずである。

寒い季節には真つ暗なうちに出発していたのだらう。

岷山と六之助が最後の峠にさしかかったとき、秋の短い日は落ちてあたりは暗くなっていた。わずかに西の空に残照があり、その方角に富士の形をした山が黒く浮かび上がっているのが見えた。ユキが描いていた山だ。岷山は、ついにユキの住む土地に来たことを実感するのだった。そして、峠の前方に赤々

と灯を点した屋敷が見えて来た。庄屋甚九郎の屋敷である。岷山たちを迎えるために松明を何本も並べて焚いているのだ。岷山はその屋敷の前にあのユキの姿があるのだと思うと、胸が高鳴るのだった。

近づくとそのれは実に大きな屋敷であつた。屋敷の後ろには黒々とした森が迫っており、屋敷の前を北に向かう道が通っている。岷山たちがいつ現れるかと待っていた者が、何事か大きな声を上げながら屋

敷の中に駆け込むのが見えた。すると入れ違ふように屋敷の中から甚九郎の見慣れた姿が現れ、走りよつて岷山の手をとるようになして中に案内した。しかし玄関を入るときになつてもユキの姿はなかつた。

座敷には、すでに豪勢な酒席の準備が整っている。岷山はそのとき藩の奥詰の役職についており、今回の旅行も藩命によるものであつたから、これを迎えるのに村役が相当のもてなしをするのは当然のこと

ではあつたが、それにしてもそのときの甚九郎のもてなしぶりを、岷山は身に余るほどのものだと思つた。

岷山と六之助が旅装を解くのを待つようにして酒宴は始まつた。席には上伏谷村の三役が顔を揃え、山間部にもかかわらず新鮮な魚が膳を賑わしていた。三役の一人組頭の久四郎は巖島でユキと一緒にいたセンの夫である。そのセンの妹ハマも巖島と一緒に



あり、甚九朗がユキの描いたものと偽って岷山に送った絵を描いた作者である。しかし宴が進んでもユキをはじめセンもハマも姿を現わさない。

岷山はここに到着してからずっとそのことが気にかかっていたのだが、姿どころか甚九朗はユキのこゝとを口にさえしないのだ。岷山のほうから、自分が親しく指導をしてきたユキのことを尋ねても少しもおかしくはなかつたはずであるが、岷山はこのとき

自分からユキのことを口にするのは何となく憚られる気持ちかしていたのだ。

岷山は、そのような自分の態度は不自然で、甚九郎に何か猜疑心のようなものを植え付けることになるかもしれないと思つたりもした。

宴が終わりに近づいたころ、センとハマが来て挨拶した。ハマは、

「その節は大変失礼なことをいたしました」

と頭を下げるのだった。甚九郎が岷山に送った絵の一件のことである。そしてハマは、

「先生はさぞお怒りでしようが、そのおかげで思わぬ指導が受けられて、自分にとっては大変勉強になりました」

とありがたがるのだった。ハマも絵を描いているのだった。ハマは、自分はユキのように上手くはないが、絵は好きで長い間続けているのだとはなした。

ハマの口からユキの名前が出たのをきっかけに、岷山はこのとき初めて、ユキの姿が見えないがどうしてかと尋ねたのだった。ハマがまさによい出そうとしたときそれを遮るように甚九朗が口を開いた。

「ユキはまつさきに先生にご挨拶せねばならないところですが、あいにく具合を悪くして臥せっておるものですから、せつかくの先生をお迎えしての席に顔も出せずまことに申し訳ございません」

というのだ。ハマは、いいかけた口を半分あいたまままで甚九朗のいうのを聞いていたが、そのまま黙つてしまった。甚九朗はユキの病の様子を説明しようとしないうで、岷山のこれからの写生の予定などに話題を変えてしまった。

その席には当然ソエも忙しく立ち働く姿を見せているのだが、岷山とは最初に顔を見たときに挨拶した以外、視線を合わそうともしない。

岷山は、ユキが病で顔を出せないのなら仕方がないにしても、甚九朗自身あんなに熱心にユキが絵を描くことを後押ししてきたのだから、もう少しはユキのことを話題にしてもよさそうなものだ、大變不満であつた。そして、ユキが最後に広島で岷山の指導を受けたとき、事情があつてしばらく絵がかけなくなる、といったことを思い出した。事情というのは自分が身体をこわしたということだつたのだらう

か。岷山はあれこれ考えをめぐらせたが、甚九郎は、ユキとは関係のないはなしを続けるのだった。岷山は、この旅行の最大の眼目と内心思っていたユキとの邂逅がなくなってしまうのかと不安にかられるのだった。

その夜、岷山と六之助は隣り合った広い部屋にそれぞれ寢所として案内された。そこには藩主が寝て

いるよりも分厚いと思われるような寝床が敷かれていた。六之助が岷山の部屋にやってきて打ち合わせをした。翌日はこのあたりの写生を昼過ぎまでしたあと、和田村の湯ノ山温泉まで行くことになっていく。湯ノ山温泉では岩田屋という温泉宿が宿泊場所に決まっている。

実は、岷山はこのとき口実を作つてここにもう一泊しようとして心に決めていた。このまま明日の昼過ぎ



に出発したのでは、ユキの顔さえ見ずに終わってしまふかもしれない。ここまで来てユキに会うこともできず、何も知らないまままで立ち去ることなどどうしてもできない。そもそも岷山にとってこの旅行はユキの住む土地で、絵に関する何らかの時間をユキと共有するためには計画したようなものなのだ。しかしそのことを六之助には黙っていた。

六之助は計画に沿った打ち合わせをすませると、

「あんな厚ぼったいふとんでは滑り落ちそうで眠れそうにない」

などといいながら自分の部屋に戻っていった。この季節にしてはまだ夜具が多すぎるような気がしたが、夜が更けてくるとこれでちようどよいくらいに冷えてくるのだった。岷山はふとんのなかで、ここにもう一泊する口実をどう作るか考えを巡らせて、いつまでも眠らなかつた。

岷山が、うまい口実を思いつかないまま、昼間の疲れでうとうとしかけたとき、廊下の障子がそつと開いたかと思うと、その隙間から人影がすばやく中に入り込んだ。岷山は人が侵入したので一瞬ドキツとしたが、小柄な姿からそれがユキであることがすぐに分かって起き上がった。ユキは眠っているものとばかり思っていた岷山が、すぐに起き上がったので驚いたようだったが、声は出さなかつた。ユキは

素早い動作で岷山の傍に来て両手をつき、

「お久しぶりです。お会いしようございました。あさつてなら旦那様が仕事で遠出しますので写生のお供ができます」

それだけ耳打ちするやうにいうと、岷山の返事も待たずにするりと部屋を出て行ってしまった。あとには微かな香りだけが残った。

ユキは、岷山たちがここに一泊しかしないことを

知らないのだろうか。それともそれはどうであれ、あさつて岷山と共に過ごしたいから、できるものならそのようにして欲しいというつもりだったのだろうか。岷山がさらに眠れなくなつたのはいうまでもない。あさつてということは、さらにここに二泊する口実が必要になる。とにかく六之助を計画どおりに行かせることにしよう。と岷山は考えた。そしてあさつて一日ユキと写生したあと、六之助を追いかけ

れば何とかなるだろうと考えた。いずれにしても予定外の行動はもう岷山一人の策ではなく、ユキと二人の秘密の策として力強いものになったのである。

それにしてもユキの様子は、とても病気で臥せっているようには見えなかった。部屋に出入りする動作はまるで忍者のように素早かった。宴席の場に姿を見せなかったのには、何か大きなわけがあると考へざるを得ない。岷山は、宿泊を承諾する返事がな

かなか来なかつたこと、甚九朗がユキのことについては何も説明しようとしないうこと、ユキが夜中に突然入つてきて意味深長な耳打ちをして、返事も聞かずに出て行つたこと、これら腑に落ちないことを一つ一つ思い浮かべていると、ますます目が冴えてくるのだつた。あれこれと頭の中で堂々巡りしているうちに、さすがに今日一日の旅の疲れが出てきて知らぬ間に眠りに落ちていた。

翌朝岷山は、旅行初日の疲れと、昨夜の出来事のために十分に眠れなかったことで体がだるかったがそれでも六之助と二人で写生に出かけた。甚九朗は案内や手伝いに人を付けようと申し出てくれたが、前夜の席で話の出たいろいろなところを気ままに写生するからと手伝いは断った。朝食のときも、写生に出かけるときもユキは姿を見せなかった。

昼食をとり、甚九朗のところに一度戻り、午後湯



ノ山温泉に向かうというのがこの日の予定である。少なくとも六之助はそのようなつもりでいたのだが、岷山は密かに考えを巡らせていた。甚九朗の屋敷にさらに泊まらざるを得ないと誰もが納得するようになる行きを、これから演出しなければならぬのである。

岷山は、ここらあたりの景色はすばらしいといつて、さかんに山や森、川と精力的に絵筆を動かした。

ユキの絵で見た風景が随所にある。昨夜地元の人たちから教えられた場所の半分も見ないうちに昼を過ぎてしまった。話にあつた白井ノ瀧というのもまだ描いていない。六之助が、ほどほどに切り上げて昼食にしないと湯ノ山に行くのが遅くなると促すのだが、岷山は非常な熱心さで写生に精を出している。この旅行の目的が単なる風景を写生するためのものではないことを考えると、六之助には岷山の行動は

異常に写るのだった。湯ノ山への道中にも写生を予定している場所があるのだからとの六之助の説得に、岷山はしぶしぶ甚九朗の屋敷に昼食をしに戻ったのだった。そのときまだ六之助に、この日も泊まることとはいつていなかた。岷山は六之助にも不審に思われないうように細心の注意を払っていたのである。もしユキとの夜中の約束、実際にはユキが一方的にいったことなのだが、その約束がなかったらこれほ

ど気を配らなかつたかもしれない、岷山はとてつもない秘密の行動を画策する隠密のような心境になつていたのだ。もともと策略をめぐらせて何事かを推し進めるようなことをする人間でなかつた岷山にとつては、まさに一世一代の大芝居である。

甚九郎の家で、昼食中も岷山の心は落ち着かなかつた。計画では、この食事がすむと湯ノ山に向かつて出発しなければならぬ。岷山は自分の気持ちを

悟られまいとしてことさらに落ち着き払った風を装って食事をするのだった。昼食の席でお相伴していた近所の年寄りなどは、岷山がこの地の風景をすっかり気に入って、絵心が湧いたのだとしきりに感心して、

「さすがに先生ほどのお人になると見る目が違いますのー。わしらにしたら毎日見慣れたなんでもない景色じゃが、先生はいくらでも立派な絵にされるの

「じゃなあ」

と午前中に描いたという、まだ仕上げをしていない絵を覗き込みながらいうのだった。岷山もそれに答えて、このあたりの景色の素晴らしさをさかんに褒めそやすのだった。それをみて六之助が、あまり時間にも余裕がないのだからさっさと食べましようかと催促するほどだった。

食事が一段落して出された茶を飲みながら岷山は

ついに、考えた挙句の策を六之助に指示した。それは、これから六之助は計画した風物は勿論、ほかにもこれといったところを写生しながら先に湯ノ山に向かい、自分は午後もこのあたりの写生をして、夜には湯ノ山に着くように行くというものであつた。六之助は、いったい何をいいだすのかと驚いたが、岷山が何か意味ありげに頷いて見せたのを見て、ここは岷山のいうとおりにしようと考えたのである。

六之助が旅支度をしていよいよ出かけるときになつて、岷山はさらに、

「このあたりの写生であまり遅くなつたら、私は今夜ここにもう一泊させてもらうかもしれない。万が一そんなことになつたら、庄屋友平のところで落ち合おう」

と耳打ちをするようにいった。庄屋友平というのは、湯ノ山温泉の次の宿泊地となつてゐる上筒賀村の庄



屋のことである。六之助は特に異存はないという風に頷いた。

その午後、六之助は和田村の湯ノ山温泉に向かつて出発し、岷山は上伏谷村の中を一人で歩き回って写生をした。この地域でどうしても描いておかなくてはならないのは、地元の人から聞いた白井ノ瀧である。岷山はこれをわざとこの日も描き残した。夕方疲れきったという様子で甚九朗の屋敷に戻ってき

た岷山は、まだ描き残したところがあるのもう一泊したい旨を伝えた。甚九朗はこれを快く了承した。ただ自分はあすから仕事で遠出をするので、岷山が発つときに見送りできないのが申し訳ないという。その夜は、昨夜のような宴席はなかつたが、甚九朗も同席して夜遅くまで歓談した。そこにもユキの姿はなく、ユキの話も出なかつた。岷山はこの日に描いた二十枚を越える絵を広げて、そこに描かれた山

河や寺の名やそれらについてのいわれなどを席の者たちに聞いては細かく書き込むのだった。そのようすはいかにも藩の仕事としてこのあたりの地勢、風物を写生している姿そのものであつた。

その夜は何事も起こらなかつた。明け方まだ暗いうちに、表が騒々しくなつて岷山は目を覚ました。甚九郎が出かけるようだ。岷山は、床に入つたまま

でその物音を聞いていた。やがてあたりはもとの静けさに戻った。岷山はまたうとうとした。次に目が覚めたとき、あたりはすっかり明けきっていた。障子の外で食事にどうぞというソエの声に起こされた。岷山が返事をしないでいると障子が開いて、まだお休みですかとソエが顔を出した。ソエは部屋の中に入って挨拶をすると、後ろの障子を閉め、声をひそめて、

「きょう、奥様と私が先生の写生のお供をさせていただきます」

という。岷山は起き上がって、

「ユキさんは病氣と聞いているが、どういふことなのかね」

と尋ねた。岷山のところでは、監視人のようだと思つたソエだったが、このときのソエの様子は、これまで岷山が考えていた印象とは違っている。

「奥様はご病気などではありません。旦那様が、奥様を先生にお会いさせないようにされたのです」といつそう声をひそめていたのであつた。

「甚九朗さんがなぜそんなことをするのかな」

「奥様が、先生のことを夢中になつてお話しされすぎたのです。あれでは旦那様でなくても絵なんかやめてしまえといいたくなるでしょう」

「甚九朗さんはユキさんに絵をやめろといつたのか

ね」

「ええ、だからあれ以来広島に上がらなくなつたのです。でも絵は描いておられます。そのことは旦那様も気付いておられますが、黙認されているのです。ただ、先生のところへ上がることはお許しにならないのです」

「このたびは大変なもてなしだったけど、そういうことなら甚九朗さんは、心中私のことをよくは思つて

いないようすな」

「とんでもありません。いつも先生のことを尊敬しているとおっしゃっています。ただ、旦那様は奥様をととても大事にしなさっているのです、奥様がたとえ先生のことでも夢中になられるのが許せなくなってしまうのです。先生はなににも悪いことはございません」

「ユキさんはいまでも私の指導を望んでいるのか



ね」

「そのお話はまた後で。とにかくお食事をどうぞ。でないと写生に出かけるのが遅くなりますから」そういってソエは部屋を出ていった。

岷山が身支度をしてから朝食の部屋に行くと、ユキが待っていた。岷山が席につくとユキが膳を整えたのだった。手伝っていたソエは、その場をユキに任せるようにして部屋を出て行った。ユキは待ちに

待ったときがついに来たという風に、

「私の配慮が足らなかつたために、先生に大変ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。でも、今日一日を本当に大切に過ごしたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします」

といささか改まった感じだが、人懐こい笑顔で、挨拶をするのだった。しかし、岷山は自分の心を読まれているのではないかと感じた。つまりユキは、自

分に好意を持っている岷山の心を手玉にとつて、  
ように振舞っている。岷山は思つたのである。

「甚九朗さんは、今日あなたが私と写生に出かける  
ことを知っているのですか」

岷山は、気にかかることがたくさんあつたのだが、  
まずそれから尋ねた。ユキはそれには答えず、

「今日はどのあたりを写生されるのですか」  
と尋ねるのだった。岷山が白井ノ瀧を描き残してい

るので、まずそれから描きたいというと、それならかなり歩かなくてはならないから早く出かけましよう、岷山の食事を急かせるのだった。

岷山とユキは絵の道具を持ち、ソエは弁当を持って三人は出かけた。空は青く澄みわたって、森や山にはちらほら始まっている紅葉が彩りを添えている。明るい御影石の川底を清水が渦巻きながら流れる谷

川沿いの細い道を小一時間歩いたところに白井ノ瀧はあつた。谷川は決して大きくないのに、なかなか見事な瀧である。岷山とユキは川原の岩に並んで腰をおろすと、それぞれ思い思いの構図で瀧の写生を始めた。ソエは初めのうち興味深そうに二人の描く絵を見ていたが、二人がものもいわずに一心に描き続けるので、飽きてきて少し離れた日当たりのいい場所に腰をおろして居眠りを始めた。岷山は一枚が

出来上がると、少し位置を変えて二枚目にとりかか  
る。ユキもまた岷山の隣に並んで二枚目を描き始め  
るのだった。二人はときどきお互いの絵を覗き込み、  
笑みを交わすだけでほとんど話というものをしなか  
った。

岷山は、これほどの幸福感を経験したことは自分  
の長い人生ではじめてだと思った。そして、ユキも  
きつと同じ喜びを感じているはずだと思った。

二人の写生はいつ果てるとも知れないように続いた。同じ対象を、場所を変え、構図を変えて描き、また対象を変えて描くのだった。ソエは、弁当のとき三人で歓談しながらくつろいだ以外は、ほとんど離れた場所ですることもなく時間を費やしていた。ユキと岷山はそうしたソエの存在をすっかり忘れてしまっているかのように絵に没頭するのだった。たちまち時間は過ぎて、秋の日が西に傾き始めた頃よ

うやく二人の写生は一段落したのであった。谷川沿いは日陰になって急に寒くなってきた。三人は急ぎ足で帰途に着いた。

途中でユキが、きょうは空がきれいだから夕焼けを見ていきましようというので、三人は屋敷とは反対側の斜面を登っていった。それは甚九郎の屋敷から見ると東方に聳える寒山（さむやま）のなだらかな裾野であつた。そこから振り返って西を見ると、



はつとするような風景が広がっていた。岷山が五日市で海岸線を離れてから初めて見る開けた眺めである。

目の前に大きい阿弥陀峰（あみだみね）から遙かな大嶺（おおみね）まで稜線が重なり合って続いている。それはひと尾根ごとに色を変えながら連なっている。

太陽は大嶺の右肩の辺りに落ちようとしていた。

ユキが描いていた富士の形をした山である。目を焼くぎらぎらした太陽は、山の向こうに沈むにしたがつて力を失い、やがて沈みきつた瞬間、山々はそれまで見えていた幾重ものひだを隠して、赤みのさした空を背景に影絵のように浮かび上がった。太陽が沈んだ後もしばらく、山の背後から繰り広げられるさまざまな光の演出は続いている。あたりが暗くなつて風景がはつきり見えなくなつてからも、山々の

稜線をめぐる光は、金色からあかね色に変わりながら微かな残照へと変化していくのだった。ほとんど色を失って黒々と浮かびだした稜線は、秋の冷たい空気と周囲の静寂の中に厳然と存在感を示しているようであつた。岷山はこれまでに見た最も感動的な夕焼けだと思つた。

時が過ぎるのを忘れて三人は立ち尽していた。だれも言葉を発しない。言葉は必要なかったのだ。岷

山はユキがそばにいて、この風景を眺めていること以上の幸せなど考えられないと思った。岷山は、風景の美しさに感動した二人の心は完全に共鳴し合っているのだと思った。岷山は、並んで夕焼けを眺めているユキの肩をそっと抱き寄せたい衝動に駆られた。だがそうはしなかった。

ソエが最初に我に返って、帰りを急ぐように二人を促した。もう足元は暗くなり始めて、空気はひん

やりとしていた。

岷山はいつのまにか、この日も甚九朗の屋敷に泊まるような錯覚に囚われていた。六之助と湯ノ山温泉で落ち合うという約束はすでにきのう果たせず、きょうになり、その次の宿泊先である上筒賀村の庄屋友平の屋敷で落ち合うことも難しくなっていたのである。そのためには、遅くとも昼過ぎにはこの辺

りを発たなくてはならなかつたのだ。岷山はこのような夕方になつてからそのことに気付いた。もうこの時間から出発しても五里以上ある上筒賀村に着くのは深夜になつてしまふ。ユキもソエもこのあたり  
の山道は熊が出ることもあるので、夜道を一人で歩くのは危険すぎるし、夜は駕籠や馬を出すものもないからもう一晩泊まつて、明日の朝早く出かけるように勧めるのだつた。岷山は、勧められるまでも

なくそうするしか仕方なかつたのである。

それにしても落ち合うはずの庄屋友平のところ  
岷山が現れないと、六之助は道中何かあつたのかと  
心配するのではないかと気にかかつた。写生で遅く  
なつたりしたらさらにここに宿泊することもあると  
いっておけばよかつたと後悔した。後悔したところ  
で、ここは六之助の判断に任すしかない。

気にはしながらも岷山は、ユキのところにもう一

日長く滞在できる嬉しさで、六之助への心配はそれほど大きく心を占めていなかった。

庄屋甚九朗の屋敷での三回目の夕食には、初めてユキが同席した。ユキだけでなくセンとハマもやってきた。巖島の顔ぶれが揃ったのだ。師弟の垣根のとれた楽しい時間であった。岷山はユキには何度も会っているが、ユキがこの日のようにのびやかな美しい表情を見せたのは巖島の包ヶ浦以来のことだつ



た。夜遅く話し疲れてセンとハマが帰っていった後  
も、ユキと岷山の話は尽きなかった。それはすべて  
つもりにも積もった絵のはなしであつた。

六之助は次の日、上筒賀村の次の宿泊地である加  
計村まで行っているはずである。その六之助に追  
つぐために岷山はあす十里以上旅をしなくてはなら  
ないことになる。二人ともそのことを気にして、早  
く休みましようとは何度も口にしながらなお話が途切

れないのだった。

ユキが、岷山のところに来なくなつてから描いたという絵を持ち出してきたので、さらに二人の話は終わるきつかけを失つてしまつた。ユキは岷山が絵について話すすべてのことに強い関心を示し、細大漏らさず吸収しようとするのだつた。岷山は、ユキの精神の若々しさにしばしば感動させられた。岷山にも、かつてはそういう時代があつたのだ。そして

いまもそうありたいと願っているのだが、ユキにはとうていかなわないと思うのだった。

しかし、このときの岷山はユキの精神の活発さに誘われて、六十を越した肉体から精神が抜け出して興味と好奇心の世界を自由に飛び回っているような気がしていた。

そろそろ東の空が白むのではないかというころになつて、ようやく二人の会話は疲れのために散漫に

なつてきた。少しは休んでおかないと次の日の旅にさしさわるからと岷山が自分の部屋にさがろうとしたとき、二人の視線がぶつかり合つた。どちらからもそらそうとしないので、岷山はとても長い時間見つめあつていたように感じた。

## 家出

翌朝岷山が寝不足の顔で朝食に出て行くと、そこに旅支度をしたユキが待っていた。ユキは岷山を見ると、途中までお供するつもりだという。しかもソエが今日はいないので自分ひとりについて行くというのだ。岷山はこの日遅れを取り戻すために十里ほどの道のりを一気に歩くつもりでいた。途中馬を使

えるところもある。それくらいのことはいくらまでも経験してきたし、みちすがら写生をしたりしなければ充分に行ける距離なのだ。写生は六之助がしつかりとしてくれているはずである。しかし、女連れではそうはいかない。途中までといつてもどこまでのもつりなのだろう。ユキはまるでこれから先ずつと岷山と旅をするようになかつこうをしているではないか。このとき岷山の心に戸惑いの芽が生まれた。

ユキは、そんな岷山の迷いが目に入らないように、朝食の膳を準備している。ユキはもう食事をすませていたので、岷山は一人で食べた。岷山は、どの辺りまで一緒に来てくれるつもりなのか尋ねたがユキは、

「ええ」

という生返事をするだけであつた。

出かけるときになつても、ユキは何もいわず、心

なしか緊張した表情をしている。広島にソエとともに来ていた浅吉という使用人が一人、岷山とユキを見送った。浅吉は、いま上伏谷村には籠も貸せる馬もないが、二里先の湯ノ山まで行けば馬を借りられるはずで、そこから水内（みのち）川沿いに北上すれば、加計には近いと岷山に教えた。岷山は浅吉に礼をいってから歩き始めた。ユキも岷山に従った。本来なら見送りの者に、甚九朗への礼を言付けると



ころなのだが、何とも妙な具合の出発になつてしまつたのだつた。

甚九朗の御殿のような屋敷はすぐに見えなくなり、山裾の寺の前を通るときもユキは黙つてついて来る。ユキはただならぬ決心をしていると岷山は思った。だから、そのようなユキに対してどう声をかければいいのか、困惑していた。

ずいぶん歩いてから、ユキが初めて口を開いた。小さな声だったが、いったことは岷山にはつきりと聞こえた。

「ずっと、連れて行ってください」とユキはいったのだ。

岷山は、ただの見送りでないことは何となく予感していたが、その言葉を聞いたとき、全身に戦慄が走るのを覚えた。

たしかに岷山はユキのことを好ましく思い、いつも会いたいと思い、会えばいつまでも一緒に過ごしたいと思つてきた。そして、ユキが自分のことを、師として以上に思つてくれることを期待していた。それにもかかわらず、自分にはユキと駆け落ちをする覚悟などまったく無かつたことをいま思い知つたのだ。

すべてを捨てて岷山のもとに走ろうとしているこ

とを、昨夜の尽きることのない会話の中で、ユキは  
仄めかしさえしなかつた。いつたい、ユキはいつこ  
の重大決意をしたのだらう。

岷山がなかなか返事をしないのでユキは、

「ご迷惑なのですね」

といった。それは迷っている岷山に決断を迫る言葉  
であつた。岷山は、考えがまとまらないので、  
「迷惑などということはありませんが・・・」

と曖昧な返事しかできなかつた。

「私はもうあとには引けないのです。ソエと浅吉にだけ家を出ることをいつてきました。他の者は誰も知りません。二人には、旦那様に聞かれても絶対に私が先生と一緒に出かけたといわないようにきつくいい聞かせてきました。あの二人は信用できません。もし先生がおいやだったら、どこか遠くまで行つたところで私は別れます。とにかく私はもうあそこに

は帰れないのです」

そして、

「帰りたくないのです」

といい足した。ユキはこわばった表情でまた黙りこくって岷山の後をついてくる。岷山はうろたえている自分の気持ちをユキに気付かれまいと平静を装うのに一生懸命だった。

昼が近づいたころ水内川の川原に出た。正面に、

岩のごつごつした異様な姿の山が聳えている。こんな状況ではあつたが、岷山はこの山を六之助は描いてくれたらうなと思つた。

ここはもう和田村、湯ノ山はすぐ近くである。そこに行けば浅吉がいうように貸し馬があるはずである。そのとき、岷山はこれからどうするかを決めた。一頭は加計に行く自分のために、そしてもう一頭をユキのために借りてそれで甚九朗のところに帰るよ

う説得することにしたのだ。その前にふたりは川原で休むことにした。岷山がユキを振り返って、川原のほうを指差すと、ユキは黙ったまま頷いた。二人は大きな白い岩がごろごろした川原におりて、腰を下ろした。二人は岩だらけの山を見上げながら、ユキが作ってきたにぎりめしを食べた。

岷山が、ユキにいった。

「このすぐ先が湯ノ山のはずです。そこで馬を二頭



借ります。私は加計に急ぎますが、もう一頭は馬子も頼みますから、あなたはそれで上伏谷村にお帰りなさい」

ユキは川の流れの一点を凝視したまま岷山の言葉を聞いていたが、

「上伏谷には帰りません」

それだけをいって、黙り込んでしまった。岷山は、それ以上あれこれユキを思いとどまらせるようなこ

とをいうことができなかった。

岷山は、親の代から藩に仕える家に育ち、それらしい人生を送ってきた。現実には踏み切ることなどとうていできないことと悟ってはいたが、心の隅では自由な生き方に憧れる気持ちもまったくなくなかったわけではない。同じ藩に仕える親友春水の息子が脱藩して大きな問題になっていた。もちろんそんな生き方は自分には無縁なことであるのはわかってはいた

が、岷山はその息子の生き方に共鳴する部分があつたことを思い出した。

だからここでユキに、自分にはお役目があつてそれを捨てることはできないとか、家庭を捨てられないなどといい訳をするのは恥ずかしいとの思いがあつた。現に目の前にすべてを捨てて身一つで出てきたユキの果敢な行動に比べて、自分の型にはまつた生き方はひどくみすぼらしく思えるのだつた。

ユキへの憧れにしても、なんとずるい考え方だつたかを思い知らされていた。人を想うということはどういうことかを、ユキに身をもつて教えられているような気がした。岷山は敗北感に似たものを感じていた。

このときすでにユキは岷山の戸惑いに気付いていた。長い沈黙の後でユキは呟くように、

「上伏谷村に帰ります」  
といたつた。

## 別れ

坂道に温泉宿が建ち並ぶ湯ノ山で、岷山は二頭の馬と一人の馬子を頼んだ。馬の背に乗せられたユキ

は岷山を見おろした。その頬は青ざめてこわばって  
いたが涙は見せなかつた。馬子は、そのまま出発し  
ていいのか迷つて、岷山とユキをかわるがわるに見  
ている。岷山が、

「しつかり頼みますよ」

と行って、馬子を促したので馬はゆつくりと歩き出  
した。馬子に曳かれる馬の背に揺られながら遠ざか  
つて行くユキの姿を岷山はいつまでも見送つた。や

がてユキの姿は森の陰に見えなくなつた。ユキは一度も振り返えらなかつた。

岷山は、夕方早く加計村の庄屋の屋敷に着き、無事六之助と落ち合つた。湯ノ山温泉、石ガ谷峡、湯来温泉、龍頭の瀧などこの旅行の大切な調査場所を六之助に任せての近道であつた。六之助は、  
「先生がすっかり上伏谷村での写生を気に入つてい

る様子だったのので、こういうこともあろうかと、ここまで先回りしました。私の判断は間違っていないせんでしたね。途中の写生も存分にできてきましたからね。宴席で話に出た白井ノ瀧もちやんと描いてきましたよ」

と、得意になっていった。

「それはよかった。上筒賀村で君がどう判断するか気になったのだがね。余計な心配をせずさつさと



先に進んでくれて助かったよ」

「それで、上伏谷村はどうでしたか」

「君も見た通り景色のいいところなのでふんだんに写生しましたよ」

「それだけですか」

「それだけさ」

「それならいいのですが」

「嘘だと思ふのならこれをみなさい」

そういつて岷山は上伏谷村で描いた絵の束を六之助の前に投げ出した。六之助は、ニヤニヤしながら岷山の顔を覗き込むのだった。岷山が、自分の顔ではなく絵を見ろというように指差したので、仕方なくそれらを手にとって見るのだった。たしかにそこに描かれた絵は、勢いのある見事な絵ばかりであった。そこには白井ノ瀧の絵もたくさん含まれていたが、自分が描いたものとはまるで違うと六之助は思った。

岷山が上伏谷村で充実した写生のときを過ごしたことを六之助は納得したのだった。

こうして六之助と気の置けないやり取りをしていると、岷山は今朝から続いていたユキとの重苦しい圧迫感から少し解放されるのだった。しかし、そうしている間もユキが最後に見せた、青ざめた表情が岷山の脳裏から離れなかつた。実のところ岷山は、一人の女性に対して大変なことをしてしまつたとい

う自責の念に押しつぶされそうになっていたのだ。

いまユキはどうしているだろうか。甚九朗とどのように相對しただろうか。あるいは、屋敷に帰らなかったかというようないふことがあるだろうか。そう考えると、暗い山道でひとりうろついているユキの姿が思い浮かぶのだった。その夜岷山は一睡もできなかつた。

岷山と六之助は、それからは計画どおりに旅程をこなして、十月十九日無事広島に帰り着いた。六之助のおかげで途中途切れることなく絵と文を埋めることができたことはいうまでもない。岷山は、六之助が一人で描いたたくさん絵の中から適当なものを選んで、それをもとに新たな絵を描いた。そうして数か月後に、完成させた絵と、旅行中に見聞きしたことを日記風に綴った『都志見往来日記・同諸勝

『図』を藩主に献呈した。

こうして無事役目は果たしたものの、岷山にとっては心にあまりにも重いものを残す旅となつたのだつた。

岷山は、旅から帰るとすぐに旅行中世話になつた人たちに礼状を書いた。もちろん上伏谷村の甚九郎にも丁重な礼状を書いた。しかし、文面には苦勞し

た。ユキと甚九朗がその後どうなっているのかわからなかったからだ。そもそも、あの時ユキが上伏谷村に帰ったかどうかさえわからないままだったのだ。ソエと浅吉が口止めを守っていれば、甚九朗はユキが岷山と一緒に家を出たことを知らないはずである。岷山は、何も知らないことにして、大変なもてなしや、心ゆくまで写生できたことを感謝し、文末にユキの病状を見舞う内容にしたのだった。

何日かすると、礼状に対する返事として、旅の無事と役目の成就を祝す内容の手紙があちこちから届き始めた。甚九朗からも返事がきた。それは、多少なりとも先生のお役に立てて大変光栄ですといった型どおりのもので、やはりユキのことには一言も触れられていなかった。

あの日湯ノ山で馬に乗せて別れたきり、ユキがどうなったのか岷山は全く知らなかったし、知る由も



なかつたのである。したがって、甚九郎が岷山の礼状をどういふ状況で受け取り、返事を書いたのか想像もつかないままだった。

岷山と出会うまでのユキ

ユキが湯ノ山で岷山と別れた後のことを語る前に、ユキが巖島で岷山と出会い、どのようにして岷山の指導を受けることになったのかを少し話しておこう。

ユキは、巖島で岷山に出会う数年前から、ハマとともに和田村の湯ノ山温泉の近くに住む七左衛門という者の画塾で絵を学んでいた。七左衛門は裕福な農家の二代目で、長崎まで修業に行くほど絵に打ち込んでいた。和田村に帰ってからも農業は引き継が

ず、近在の者を集めて画塾をやりながら、自らも盛んに絵を描いていた。

ユキもハマもそれまでは絵を描いていなかったが、和田村の画塾の評判が上伏谷村まで流れてきて、それにつられて面白半分に通うことになったのだった。その評判というのも、大変男ぶりのいい若い先生が教えているそうだといった程度のものだったようである。このところ裕福な家庭の子女は、何か習い事

をするのが当たり前のようになっていたが、それは  
広島のような城下だけでなく、こういった上伏谷村  
や和田村のような山間の村々にまで広がっていたの  
である。ハマはユキより一才年上で、二人は大変仲  
がよい間柄だった。最初二人は浅吉を伴にして、絵  
の道具も何も持たずにぶらりと七左衛門の画塾に顔  
を出した。その帰り道二人は七左衛門がいい男だと  
いう話ばかりして帰ったという。それから二人は月

に二、三度七左衛門の画塾に通うようになった。上伏谷村から和田村まではおよそ二里の道のりで、伴はいつも浅吉であつた。

七左衛門の画塾に通い始めるとすぐに、ユキはひとり飛びぬけた才能を示し始めた。そのことは岷山がユキの絵に最初から心を動かされたほどだから、間違いないところだったのである。

ユキとハマが、七左衛門の画塾に通い始めたのは、

例の巖島の数年前だったというから、ユキはまだ三十代半ばで甚九郎に嫁いで七、八年といたったころであつた。ユキと甚九郎の間に子供はなく、ハマも一人身だったので、絵に打ち込む生活ができたのである。このとき甚九郎は四十を過ぎたばかりだったが、すでに上伏谷村の庄屋としての重責を担っていたのである。

七左衛門はたちまちユキの才能に気付いて特に熱

心に指導するようになったという。塾生のほとんどは裕福な家庭の婦人や娘など女性だったので、七左衛門のユキに対する熱意に敏感であつた。勘のいい七左衛門は、すぐにその態度を改めたそうである。七左衛門にとって塾の評判は大切なものだつたからであらう。ユキの才能を高く評価しながらも、特別にユキに時間を割いたりはしないようにしたのだ。いくら態度に表さないように気をつけていても、七

左衛門とユキが絵を通じて共感し合うことを止めることはできない。初めは妬みもあつて反発していた塾生たちも、ユキの才能を認めるようになる、七左衛門とユキが近づくことを自然の成り行きのように受け入れるようになった。

一年ほどしたころ、七左衛門はユキを助手という立場にした。それからは、ユキは塾生たちが帰ったあと居残つて、塾生たちがその日に描いた絵の添削



をしたりする作業を手伝うようになる。その間ハマは、浅吉を伴に湯ノ山界隈を散策したり、写生をしたりしながらユキの仕事がすむのを待って、一緒に帰るのだった。七左衛門とユキはさらに急速に親しくなつていった。

そうしたある帰り道、ハマはユキから重大なことを打ち明けられた。

「私、大変なことになつてしまつた」

と緊張気味にいうユキの髪に乱れがあるのを見て、ハマはすぐにことの次第を察した。

ユキは決してふしだらな女ではないのだが、とても人懐こく、またすぐに人を信じてしまうところがあつた。それは相手が男か女かの区別は無く、現にハマに対してもこのような人妻としては絶対的な秘密さえも打ち明けてしまうのだ。そのような調子で、七左衛門にも近づいていったのである。七左衛門か

らみれば、無邪気に近づいてくるユキは、自分より四才年上の女ではあったが、とてもかわいい存在であつたことは容易に想像できる。

岷山と出会つたときもそうだつたが、ユキは絵のことになると周りが見えなくなつてしまふ。七左衛門がユキの才能に気付いて熱心に指導すればするほど、ユキは絵に夢中になり、七左衛門に夢中になるのだった。ユキは、ほとんど化粧もしなかつたのだ

が、目を輝かせ、頬を紅潮させて絵に取り組んでい  
る姿は、女のハマから見ても惚れ惚れするように魅  
力的だったという。六十の岷山も同じようにそうし  
たユキに魅せられたのだ。しかし、当のユキ本人は  
自分がどのように見られているかなどまったく頓着  
しないのである。それは良くいえば天真爛漫、悪く  
いえば世間知らずといえるものであつた。

そのように信頼しきつて近づいてくるユキを、七

左衛門は恋するようになる。七左衛門はそれまでもましてユキに親切になり、二人で過ごすことが多くなつていった。ユキの心の中でも七左衛門は日に日に大きな存在となつて、とうとう密通にまで及んでしまつたのである。

ハマだけが知つた秘密は、その後複雑な人間関係を生むことになる。親友ユキの夫甚九郎をかねてから憎からず思つていたハマは、ユキの不義を機に甚

九朗に近づくことになるのである。ハマ自身も奔放な女性である。ユキが絵にばかり夢中になっているので、甚九朗はハマの接近に簡単に応じてしまう。そんなときにハマが不用意に口にしたら、

『ユキさんは、七左衛門の大変なお気に入りなのよ』  
という言葉がきっかけとなって、甚九朗はユキと七左衛門の不義を知ることになる。ハマとそんなことになっていても、ユキを溺愛していた甚九朗は、大

いに悩むことになる。

甚九朗は優しい好人物であつた。このときは、苦しみなながらもユキを許したのであつた。しかし七左衛門の画塾に行くことは禁じた。そのときハマも一緒に塾をやめた。ユキは画塾に行かなくなつてから、ぱったりと絵を描かなくなる。

そして、甚九朗の寛大さに少しずつ夫婦の仲は元に戻つていった。それと同時に甚九朗とハマの関係

も沙汰やみになつていった。

ユキが巖島で岷山に出会つたのはそんなころだつた。岷山の絵に触れて、ユキの中に残り火のように燻っていた絵に対する思いに火がついたのだ。

それからとういうもの、ユキは甚九朗に絵を再開させてくれと頼み続ける。甚九朗は先の辛い経験があるので、容易には認めようとしなかつたが、かわ



いくてしかたないユキの頼みについに折れる。そしてユキの望みどおり岷山の教えを受ける手はずを整えるのだった。しかしユキは岷山に見せるような絵ができないといつて、なかなか絵を送ろうとしない。困った甚九郎が、ハマに頼み込んで彼女が描いた絵を送ったのである。

「描いた絵を送って見てもらうだけなんてつまらない。先生と一緒に写生に出かけたいの。そうしたら

何が描きたいのか、実際同じ風景を見てお互いに何を感じるか、どのような絵にするかなどそれらのすべてが合わさって指導になるのに」と、ユキはハマにもらすのだった。

二度ばかり甚九朗がハマに協力させて時間稼ぎをしたころ、ようやくユキは岷山に見てもらえる絵が描けたといった。しかし、送るのではなく最初は持っていて直接岷山の指導を受けたいといいだして

きかなかつた。甚九朗はまたもユキの頼みに折れて、岷山の承諾をとりつけたのだつた。甚九朗は、ユキを岷山に会わせることをあまり快く思っていないなかつた。しかし相手は藩の絵師としてしつかりした立場があるうえ、六十を越した老人である。七左衛門事件からはすでに数年経っていて、夫婦の間も安定していた。それに、ユキもいまは四十を越している。そう考えて甚九朗は、ユキを岷山のところに連れて

行くことを自分に納得させたのだった。ハマは、このときのユキのことを、絵を通じて共感する相手にはどこまでも近づいていく点では、七左衛門のときと何も変わっていないと思つたのだった。

ユキは甚九郎に付き添われて広島岷山を訪ねた。その後何度か手紙による絵の指導が続いたが、岷山が江戸から帰つてからは、また広島に出かけていつて指導を受けようになる。甚九郎も初めのうちは

自ら付き添って行つたが、そうばかりもしていられないので、ソエと浅吉に伴をさせるようになった。

そのころのユキは、ハマに対してだけでなく甚九朗の前でも岷山のことを夢中になつて話すのだった。もちろん師としての岷山の素晴らしさを話すわけだが、甚九朗にしてみれば七左衛門の例があるだけに、ユキの態度は面白くなかつたといふのは想像に難く

ない。

そんなある日、甚九朗はユキが絵の道具などを置いてある部屋で、たくさんの手紙のようなものを見つけたのだ。内容は絵についての考えを書いたものであったが、随所に『お会いして・・・』とか『一緒に写生したい』とあり、『先生のことばかり考えている』といったことまで出てくる。宛名はなかつたが日付はついていた。それは、岷山が絵を送るよう

にいつてきたころから、広島通いが続いている時期に亘っている。甚九朗は、ユキが岷山を思つて書いた手紙であることを疑わなかつた。甚九朗は岷山からユキのところにとつそりと手紙が来ていないか探したが、それは見つからなかつた。甚九朗は激しくユキを尋問した。それに対してユキは、そのときどきの絵についての考えを書き留めた日記のようなものだと反論した。しかし、これがもとでユキの広島

行きはとめられてしまった。そのときすでに訪問の日取りが決まっていた一回が最後となつたのだつた。好人物の甚九朗もこのことでは堪忍袋の緒が切れ、この時期を境に元に戻っていた夫婦仲は急速に冷めていった。甚九朗はたびたび家を空けるようになつた。

岷山が探勝旅行の途中に甚九朗の屋敷に宿泊した



いと依頼してきたのはそんな時期だったのだ。甚九朗は断りたかつたのだろうが、藩の仕事に協力することは庄屋の重要な役目の一つなので、結局引き受けざるを得なかつたのである。甚九朗はたいそうなもてなしで岷山を迎えたが、ユキには一切岷山の前姿を出さないよう厳命したのだつた。

甚九朗の屋敷で、慣れない寢床で寢付かれないでいた六之助は、隣室の岷山のところに誰かが来て一

言二言なにかをいってからすぐに出て行くのに気がついていた。何をいったのかは聞き取れなかったが、六之助は廊下を立ち去るうしろ姿を見たのだ。それは間違いなくユキのうしろ姿だった。ユキが病で臥せっているというのは甚九朗のついた嘘で、ユキはきつと甚九朗に隠れて岷山となにか秘密の約束でもしたのでらう。一緒に写生に出かける約束かもしれないなどと、六之助はあれこれ想像した。

だから、そのあと岷山が落ち合う場所に二度も来なかつたときも、それほど驚かなかつたのである。六之助は、岷山との長い付き合いで、旅に出たときに岷山が多少気ままになることには慣れていたのであつた。

## 湯ノ山の別れから

さて、湯ノ山で岷山と別れたユキは上伏谷村には  
帰らなかつた。一方、ユキが岷山と屋敷を出た日の  
夜、甚九朗は二日ぶりに仕事から帰つてきた。ソエ  
から、ユキが一人で出て行つたと聞かされた甚九朗  
は、

「そうか」

といたただけで、ユキを探す意思も示さなかつた。そのときソエと浅吉は叱られる覚悟をしていたのだが、甚九朗はなにもかも予想していたかのように何もいわず、ひとり夜遅くまで酒を飲んでいた。

ユキが出て行つてから数日後、甚九朗は早くもユキを正式に離縁した。それからというもの甚九朗の暮らしぶりは傍目にも乱れ、庄屋としての役目もな

いがしろにするようになった。庄屋交代が取りざたされ始めたのであった。

ちようどそのころ、湯ノ山から遠くない石ガ谷峽で行き倒れている女が、山仕事の者に助けられたという噂があつたが、それはユキではない。ユキは馬の背に揺られて一旦上伏谷村の方角に向かつた。しかし、何丁も行かない陽だまりのある川原で少し休

みたいといつて馬を降り、馬と馬子をその場に待たせたまま長い時間歩き回ったり座りこんだりしながら考えをめぐらせていた。馬子は、ユキがあまり長いことそうしているので、急ぐように何度か促したがユキはそのたびにもう少しといつて馬子を待たせた。馬子はいましがただならぬ様子でユキを引き受けたので、それ以上強くはいえなかった。馬子が痺れを切らしたころ、ユキが心を決めたという風に

凜と姿勢を正すと、馬子に和田村の七左衛門の画塾に行くように頼んだのだった。

突然馬に揺られて現れたユキに七左衛門は驚いた。しかし事情を聞いて、自分以外に頼るところがないことを知った七左衛門はユキを受け入れたのだった。

ユキは、画塾で再び助手として七左衛門を助けながら、七左衛門と暮らすことになる。一緒に暮らし



始めると、画塾をやめてからの空白は直ぐに埋まつた。岷山と別れて大きな穴の開いたユキの心を、七左衛門が埋めることになつたのである。

しかし、一旦岷山と、岷山の絵に触れたユキには七左衛門の描く絵も、絵に対する考えも、人物そのものも以前に比べると色あせて見えるのだつた。ユキは心を突き動かされたものしか描かなかつた。そのようにして描かれたユキの絵は、老大家岷山の心

をも動かすものだった。岷山自身は、激しい衝動によつてのみ描くということにはなかつた。岷山の絵の多くは藩の記録として描かれることが多く、自分の心の発露としてのみ描くことができないユキとは立場も違つていた。しかしそうした岷山の絵も、感性豊かなものが見ると大きな感動が感じ取れるのだつた。ユキにはその感性が備わつていたのだ。岷山もユキの絵が放つているひらめきを最初から見抜いていた。

それに比べると七左衛門は描写の正確さに固執するのだった。確かに南蘋派の細密な画風には、正確に描写できる技術は欠かせないもので岷山もそのような高い技術を持っている。しかし七左衛門の、それさえできればよしとするところがユキには物足りなく思われるのだった。

七左衛門から見ると、燃えるような心の持ち主であるユキは心をゆさぶられる存在であつた。しかし

いざ一緒に暮らしてみると、自分との価値観の違いが随所に出て、画塾での指導を巡ってもしばしば意見がぶつかるようになった。それだけでなく、画塾に来る若い女性とユキを、絵の才能とは別の魅力で比べるようになるのだった。七左衛門と若い塾生との噂が囁かれたりすることもあつた。

ユキは、七左衛門を頼ったことを後悔し始める。ユキは七左衛門と枕を並べながら、岷山の優しいが

価値あるものを鋭く見抜くことができ、目を懐かしむのだった。

ユキは七左衛門のもとに長くいることはできず、一年半足らずで画塾を後にしたのだった。

## 再会、ユキの死

七左衛門のところを去ったユキは一人で竹原まで旅をする。竹原には優れた画人たちの集まりがあり、その中には幾人かの世に知られるほどの女流画人もいると聞いて、それらの人たちと交わりたいと願ったのだ。自らの画人として生きることへの行き詰ま

りを打開しようとしての大決心であつた。そのため  
の少なくない路銀を用立てたのは七左衛門自身であ  
つた。ユキとの間がぎくしゃくしていたにもかかわ  
らずそのような援助をしたのは、七左衛門にとつて  
ユキはないがしろにできない存在だつたのだ。

竹原への途中ユキは広島で岷山を訪ねた。竹原で  
誰を訪ねて行けばいいかを岷山に尋ね、できれば紹

介状を書いてもらいたいと思つたのである。岷山ははじめ会うつつもりはないとまでいつていたが六之助の説得に折れて会うことになつた。

ユキは、湯ノ山で馬に乗せられて上伏谷村に帰るやうにいわれ、絶望感に襲われたといつた。そして、「あるとき私は、先生のおそばでお手伝いさせてもらいたいと考えていたのです。夜遅くまでお話しましたあと、朝までの短い間に大きな決心をしたのです。



ですから家を出るまでは、そのことを相談したりお願いしたりする機会はありませんでした。道中お願いするつもりだったのです。でもあのとき先生は、私と話すことさえ避けておられるようでした」

そして大変悲しみ苦しんだが、結局上伏谷村には帰らず、七左衛門を頼ったことを自ら告白した。ユキはこうもいった。

「私は巖島でお目にかかって以来、かたときも先生

のことを忘れたことはありません。いまでも私の人生で最も大切な方は先生をおいて他にありません。

先生はわたしにとって絶対的な存在なのです」

それに対して、岷山は、

「ありがたい言葉だが、私はあなたがいうような立派な人間ではありません。ごく平凡な年寄りと思つてくれた方がありがたいくらいです」

とそつけない。ユキは静かにいった。

「私にとって先生は大切な方です。もちろん絵の指導をしてくださるかけがえのない先生です。それだけでなくこんないかたは失礼かもしれないが、先生はご一緒に過ごしていてもつとも心の安らぐお方でした。いつまでもおそばにいたいと思うお方でした」

岷山は、ユキの言葉をだまっつて聞いていた。心を動かされたようすもあつたが、結局そのあとも淡々

とした応対に終始したのだった。

なんといいつても湯ノ山でユキを受け止められなかつたという大きな悔いが岷山の心を閉ざしてしまつていたのである。あの日ユキはすべてを岷山に託す決心をして家を出たのだった。そのようなユキの気持ちには岷山が心の隅で求めていたことだつたはずなのに、その場に直面した岷山はうろたえることしかできなかつたのだ。

それにもかかわらずユキは岷山をこうして訪ねてきた。それがいまも岷山を最も大切な師と仰いでいることを物語っている。

いまユキが岷山の冷淡な態度を前にしながらも、この訪問の第一の目的である、岷山に竹原で訪ねるべき人を紹介してもらいたいということを切り出した。それに対して岷山は、自分は竹原には特に親しい人物はいないからといって、とりあおうとしな

つた。

岷山が親友の春水と何度か竹原の文人たちの集まりに出かけたことがあつたのを知っている六之助には、岷山がそんなことをいうのは、おとなげない意地悪としか思えなかつた。

ユキが岷山の処を退去する段になつて、あまりにも気の毒に思つた六之助が平田屋という木綿問屋を訪ねてみてはどうかと教えたのだつた。六之助は、

この竹原の豪商が自身絵をたしなみ、みずから手ほどきをした二人の愛娘が文人たちの中で天才姉妹ともてはやされていることを知っていたのだ。

ユキは、その三月あとにもう一度岷山を尋ねた。それはユキが竹原でも自分の居場所を見つけることができず失望して帰ってきたときである。そのときユキは広島で画塾を開きたいから岷山に力を貸して

欲しいと頼んだのだった。しかし岷山のユキに対する態度は冷淡なままだった。岷山は、

「あなたは指導者には向いていないからおやめなさい」

といったきり、そのわけを話そうともしなかつた。ユキは大いに落胆したようだったが、それでもあきらめずに、

「絵には技術と同時に、なぜ描くのかという心が必



要です。そこを教えることは意味があると思います」

といい返すのだった。岷山は、

「私の考えは、もういいました」

とそっけなく突き放すだけだ。ユキはかまわず続けた。

「私は、竹原で何人かの女性の画人たちにお会いしました。もちろん、私など比べることもできないほ

ど優れた方たちです。あすこでは、たった十二才の女の子が文人の方々に注目されるような絵を描いていました。でも私には、描かれた絵の価値以上に殿方にちやほやさされているようにみえました。そのようにもてはやされるのは、絵によつてではなく、彼女たちの容姿の美しさと愛嬌によつていゝのです。私にはそのような生き方は向きません。それでは女性の本当に優れた面ははぐらかされてしまいます。

そのことを、絵を志す人たち、特に女性にわかつてもらいたいのです」

岷山がやや懽然としてこれ以上話したくないという態度を示しているのに、かまわず自分の主張を喋り続けるユキに、同席していた六之助はひやひやして聞いていた。

岷山が重い口を開いた。

「では、なぜあなたが指導者に向いていないのかお

話ししましょう。あなたの最も優れているところは、誰にもないような激しい気持ちを絵に表す力です。しかし、指導というのは常に冷静で客観的に人の描いたものを見る目が必要なのです。人の絵を自分の感情に合わせて見たのでは、正しい指導はできません。たとえば、ある風景を見て描きたいと思う感情は、人それぞれ違うものです。他の人もあなたと同じ感情を持つなどということはありません。

だから、いつも描く人の気持ちを理解しようとする  
冷静さと、心の広さがいるのです」

ユキはしばらく岷山の言葉の意味を考えていたよう  
だが、

「先生のおっしゃることはよくわかりました。でも、  
私にもそのような冷静で広い心をもつことはできる  
と思います」

というのだった。岷山は、

「そう思うのだったら、お好きにしなさったらどうです」

とそっけなくいった。そういわれても、何のきつかけも持たないユキがどうやってこの広島で画塾を開けばいいというのか。

ユキは、岷山の冷淡な態度に直面しながらも、自分の感情を抑えながらあくまで冷静に自分の置かれている現状を踏まえた上で、岷山の何らかの後押し

を期待していたのだが、それが甘えた考えであることを知ったのだった。

ユキは、思い余って岷山にこう尋ねた。

「私の絵はもう先生にとっては何の見所もなくなつてしまったのでしよつか」

「最近のあなたの絵など見てないじゃないですか。だめかどうかなんてわかりません」

「でも、あんなに私の描いたものを評価して下さい」

たではありませんか」

「あなたは、もつたいないほど大事にされた甚九朗さんを裏切つて、こともあろうに七左衛門などに身を寄せました」

「ふしだらな女だとおっしやるのですか」

「いや、七左衛門を選んだことをいっているのです。七左衛門にあなたの絵がわかるのですか。私は彼のことをある人から聞きましたが、単なる指導料稼ぎ



の女たらしだそうじゃないですか」

「もちろん、あの人は……」

ユキがこういいかけたとき、岷山はユキのことばを遮って、

「七左衛門のことなど聞きたくありません」

と珍しく声を荒げた。ユキは、言葉を続けるのをやめて憤懣やる方ないといった表情で庭に目をやって気持ちを沈めた。このときユキは一切涙を見せたり

せず、凜と背筋を伸ばした姿勢を崩さなかつた。

岷山は七左衛門に焼もちをやいているのだろうか。ということとは岷山が自分の絵を評価してくれたのは、女としてかわいいと思つたからだつたのだろうか。もしそうなら、竹原の女性たちと同じで、実際の絵の価値とは別のところで誉められていたのだろうか。かわいいと思わなくなつたら、同時に絵の評価もさがってしまふのだろうか。ユキは、自分と岷山とは

絵によつて結ばれた理想的な関係だと思つていたことが、単なる思い過ぎしだったのかと思つたと愕然としてしまふのだった。庭の光を受けたユキの美しい顔から落胆の色を読みとつた岷山は、興奮していいすぎたと思つたのか、それからあまりきつい言葉をユキに投げかけなかつた。

ユキは気持ちちが落ち着いたのか、静かに話し始めた。

「私は、いつでも先生とご一緒に写生をしたいと思  
っております。巖島のあとでも、上伏谷村のあと  
でもです。先生と包ヶ浦や白井ノ瀧で一日過ごした  
ことは、私にとっては夢のような出来事でした。私  
たちは指一本触れ合わないのに、心は完全に一つに  
なつて響き合っていました。それは男女の情交より  
もはるかに大きな喜びだと思つています。でもそれ  
は残念ながら私一人の思いに過ぎなかつたようです。

先生も絵の結びつきよりも、男女の結びつきを求められていたのですね」

こう単刀直入に決め付けられて岷山はたじろぎ同時にムツとした。

ユキの中では、一つの偶像が音を立てて崩れはじめていたのだ。

岷山が、ユキの絵が訴えかけるものの強さを高く評価し、自分にはないものとして憧れてさえいたこ

とは紛れもない事実である。しかし、ユキに指摘された通り女としてのかわいさに気持ちいを動かされていたことも認めざるを得なかつたのだ。

しかし、岷山にはあの湯ノ山の一日があつた。あ  
のとき岷山は自らユキを払いのけた。岷山にとつて  
ユキとのことは湯ノ山で終わつたのだつた。

湯ノ山での大きな出来事にもかかわらず、岷山を  
頼つてきたユキを、岷山はまたも突き放したことに

なる。

結局ユキは、画塾を始めることで岷山の協力を得ることはできないで岷山のところを辞した。往来に出たユキは途方に暮れた。この広島に岷山以外に訪ねるところは無い。ユキは僅かになった路銀をはたいて以前甚九朗と何度か泊まった旅籠に一泊してから、翌日駕籠を雇い上伏谷村に向かった。上伏谷村にもユキの帰るところは無いのだが、ユキには他に

行くところは思いつかなかつた。ユキは、ハマなら迎え入れてくれるような気がしたのだつた。

短い秋の日が西に傾くころユキは上伏谷村にたどり着いた。何事もなかつたようにこの日も大峯に陽が落ちようとしていた。

ユキは、ハマを訪ねた。そのときもまだ一人暮らしのハマは、ユキを暖かく迎え入れた。



ハマとユキは夜の更けるまで積もる話をした。ユキは岷山と別れたあと七左衛門のところに行ったこと、竹原に行ったこと、岷山に相手にされなかつたことも話した。一方ハマは、ユキが出て行つた後の甚九郎について話した。ユキがまだいるときすでに内実のなくなつていた甚九郎の家が崩壊するのは速いものだった。わずか二年足らずの間にまったく様変わりしてしまつたのだ。

上伏谷村では甚九朗は庄屋を辞め、ハマの義理の兄久四郎が庄屋になっていた。甚九朗は出て行つたまま行方がわからず、親や親戚などもどこか遠くに行つて、一家は離散状態であつた。甚九朗の家にしたソエと浅吉はそれぞれの里に帰つた。

次の日、ユキは自分が住んでいた屋敷を見にいつた。かつて竹内御殿といわれた屋敷だが、誰も住ま

なくなるとわずかの間にもう廃屋の雰囲気を漂わせ始めていた。ユキは裏手の少し高くなつたところにある墓所にも行つてみた。幾つも並んだ先祖代々の墓の前にはどれにも花が供えてある。ソエが最後に供えて行つたのだそうだ。しかし永い間そのままの花はみな枯れて折れ曲がり、倒れている。

屋敷の裏の納屋の柱や梁は羽虫の引っかかたたくもの巢に覆われていた。ユキは物陰に見覚えのある

木箱があるのに気付いた。それは書類などの古くなつたものを保存するのに使っていた木箱である。ユキは近寄つて、埃と木の葉を被つたその蓋を開けてみた。中には巻いた紙の束がいっぱい入っていた。それはユキが描いた絵の束だった。誰かが集めてこの箱に入れたのだらう。ユキはソエがそうしてくれたのだと思つた。

ユキは巻いてある一束を手にとって広げた。最初

に出てきたのは白井ノ瀧を描いたものだった。家を出る前の日、喜びに満たされながら岷山と描いた絵である。ユキは感慨に耐え切れなくなった。絵に涙が零れ落ちるのをどうしようもなかった。ユキはどれくらいそうしていただろう。足音に気付いて振り向くとハマが迎えにきていた。ハマは何もいわずにユキの肩を抱いた。どんなときにも泣いたりしないユキだったが、このときはハマの肩に顔をうずめて

身体を震わせて泣いたのだった。

上伏谷村から三里近くもある石ガ谷峡の緑色をした深い淵に沈んでいるユキが発見されたのはそれから三日後のことだつた。ユキは、ハマの胸で泣いた翌日、近所で写生をしてくるといつて出たきり行方がわからなくなつた。村中総出でユキが行きそうなところを探したが、なかなか見つからなかつた。

石ガ谷峽の淵の底に沈んでいるユキが発見されたとき、誰もが身を投げたのだと思つた。

しかしハマだけは、どんなときにも新しい道を見つけて生きていくのがユキだと信じていたので、事故に違いないと思つた。現に写生に出かけるとき、ユキは新しい描き方を思いついたといつていたといふ。前日とは打つて変わったユキの表情は晴れ晴れとしていたとハマは思つた。ただ、近所で写生して

くるといつたのに、なぜそんなに遠くまで行つたのかはハマにもよくわからなかつた。

徐々に落ち着きを取り戻した岷山は、広島で画塾を開くのを応援してもいいといいだした。六之助が使いとして、蒔絵を施した櫛を懐に、上伏谷村にユキを訪ねたのは、それから一月あまり後のことであつた。

(完)



\*この物語は、実在の人物岡岷山の『都志見往来日記・同諸勝図』作成にまつわる記録を題材とした小説であり、登場する人物もその行動もすべてフィクションです。

### 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機

会に恵まれなかつた無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となつています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュアとしてチェロを弾いて室内楽を好きただけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時、作家になることを目指して文筆を続けると宣

言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりますので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していきこうと決心しました。なんらかのきっかけ

で本作品をお手にとつて頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com)) への投稿の形でも発表していきたいと考えておりますので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆(やまなかともたか)の名前について  
與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、  
入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありま  
すが、表示されません。

### 著者紹介

山中與隆 (やまなかともたか)

一九三九年 ～ 二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始めた弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの

などジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出したもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より



## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる轉身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山  
ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

- 1 弦楽四重奏団 a
- 2 弦楽四重奏団 b
- 3 親和力
- 4 トリオ・ソナタ

5 不協和音

6 解散

7 音楽のある生活

8 ビオラを弾く生活

9 疑問

10 生きがい

11 激情

12 カルテット



## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ  
ある兵士の物語

|| 既刊のペーパーバック ||

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

## 『都志見往来日記』異聞

---

2022年5月12日 初版発行

著者 山中與隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元 pixivヨシユケイ

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---